

# mundi

The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

[ムンディ]

7

2016 July  
No.34



特集

近づくと、  
アフリカ

## 希望の果実を育てる

Zambia サンビア



都市部と農村部での経済格差が著しい、アフリカ南部のサンビア。農村部では、住民の多くがほぼ自給自足の暮らしを送っているが、慢性的な栄養不足という深刻な問題を抱えている。特にビタミンが不足していて、さまざまな健康リスクを高める要因ともなっている。

私が活動しているチンサリ郡の農業事務所では、栄養改善のために、パパイヤ、バナナ、グアバ、オレンジ、レモン、アボカドなどの果物の苗を、乳幼児を抱える母親たちを中心に配布している。配布するだけでなく、植え方の指導も行う。どれもこれまで栽培したことのない果物ばかりだが、大切に育てるために、みんな真剣なまなざしで話を聞いている。

収穫までには早いものでも1年以上かかるが、無事に実がなると、子どもたちの成長の手助けになることを祈るばかりだ。



撮影：笠井 麻菜美（サンビア/青年海外協力隊）

## あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真と共に応募先アドレスまでEメールでお送りください。  
\*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)

「mundi」はラテン語で「世界」。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

02 my photo 希望の果実を育てる ザンビア

## 04 特集

# 近づく、アフリカ

ICTで革新を起こせ！国を超えた産官学の大連携 ルワンダ  
国づくりを象徴する希望の橋 南スーダン  
感染症対策の最前線で ガーナ  
“可能性の大陸”に挑む企業



- 18 PLAYERS ミシンで作る女性の自立 PKWIを支援する会  
20 世界とつながる教室 自分の目でアフリカを見る 玉川学園高等部・中学部  
22 JICA Volunteer Story 宮澤 譲治 青年海外協力隊／ベナン／食用作物・稲作栽培  
24 JICA STAFF 吉澤 啓 アフリカ部企画役(TICAD・開発政策分析担当)  
25 JICA UPDATE

## 26 特別レポート

永島 昭浩さん  
スーダンに笑顔を運ぶ  
ごみ収集車



28 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説！

## 30 地球ギャラリー

ニジェール  
無の大地に生きる



- 37 イチオン! 本・映画・イベント  
39 MONO語り 母の手が編む誇り  
40 私のなんとかしなきゃ! 新藤 昌子 ソプラノ歌手



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

©Getty Images

近年、情報・通信や金融などのサービス産業の成長が著しいアフリカは、「最後のフロンティア」として世界から注目が集まっている



## 近づくアジアとアフリカ 新世紀の航路を開け

ヨーロッパの国々が世界と出会う大航海時代とほぼ同じころ、明の永楽帝が送り出した鄭和の船団は、アフリカ東海岸のケニアに到達し、キリンを持ち帰って皇帝を喜ばせた。それから6世紀がたとうとする今、アジアとアフリカの関係は、やはり中国を軸として変わりつつある。

20世紀末まで、アフリカは欧米の先進国に資源や農産品を売り、先進国から工業製品を購入していた。一方アジアは産業の近代化、特に中国の成長によって、資源を輸入し加工品を輸出する側に変わった。20世紀末から今までに、世界の資源需要はおよそ5割増加したが、増加分を輸入しているのはおおむね中国だ。「アジアとアフリカの関係が変わり、中国が存在感を強めていく中で、日本がどのようにアフリカに関わっていくかを考えねばなりません」と、日本貿易振興機構（JETRO）の平野克巳理事は指摘する。「これまでのように、地理的な距離感だけで遠いと言っているのは、日本は成長するアフリカ経済から取り残されていきます」

確かに中国の影響力は強いが、アフリカ市場でトップを占める日本企業も少なくない。成功しているのは、自分たちの技術を元に、アフリカで何ができるか、現地のニーズは何かを考えて、真剣に市場作りを取り組んだ企業だ。既存市場向けに作られた商品や売り方に拘泥せず、市場に合わせた新たなチャレンジを積み重ねていくことが、企業を強くする。それを教えてくれるのが、アフリカ市場だ。

### 援助から投資へ 民間の力が生きる

「10年前には、アフリカは日本人にとってまったく新しい世界でしたが、今はアフリカに行ったことがある人、行きたいと思う人も増えてきました。アフリカとのつながりは、確実に深まっています」と平野理事は言う。

を進めてきた。特に、2008年のTICAD IV以降、日本はアフリカ諸国の成長に向けた主体的な取り組み（オーナーシップ）と、国際社会によるパートナーシップを重視した開発協力を推進している。投資に向けた環境整備など、アフリカへの新たな関わり方が生まれたのも、TICAD IVのころからだ。

5回目までは5年ごとに日本で開催されてきたTICADだが、前回から3年目の今年、初めてアフリカで開催される運びとなった。今後は3年ごとに、日本とアフリカで交互に開催する予定だ。

「世界の中で、これから日本は名脇役としての地位に立つことになりました。開発援助についても、金額や量ではなく、開発援助についても、金額や量ではなく、中身が問われます」と平野理事は強調する。「アジアの成長経験をそのままアフリカに持ちこむだけでは、アフリカに対する答えとはなりません。アフリカが必要としているものを的確に届けることが大切なのです」

アフリカは現在、主に資源や農産物などの一次産品を輸出して、加工品や工業製品を輸入している。工業製品を輸出するようにになったアジアの成長国とは、取

るべき対策が違うのだ。TICAD IV以来の開発協力は、そうしたアフリカならではの状況を踏まえたものとなり、官民協力やBOP支援など、新しい開発支援の形が広がり始めた。技術協力も、ただ漠然と技術を提供して質の高い製品を作るのではなく、あらかじめアフリカ市場で買い手が付くものをリサーチした上で製作する形に変わりつつあるという。

日本のみならず、以前からアフリカへの関与が深いヨーロッパの援助機関も、アフリカ市場の変化を踏まえて新たな援助のスタイルを模索している。ケニア経済を変えたモバイルマネー「ムペサ」も、研究の開始に当たっては英国国際開発省（DFID）の後押しがあった。

アフリカ経済が石油ショック後の80年代と同じ経済的ナリスキに直面している中で開催される今回のTICAD VIは、新たなアフリカとの関わり方が問われるものとなる。「今のアフリカは、政権の質と厚く発達した民間経済の二点で、80年代のアフリカとは異なります。困難はありますが、大きなチャンスも秘めているのが、これからのアフリカ経済です」アフリカは多くの国に分断され、国境

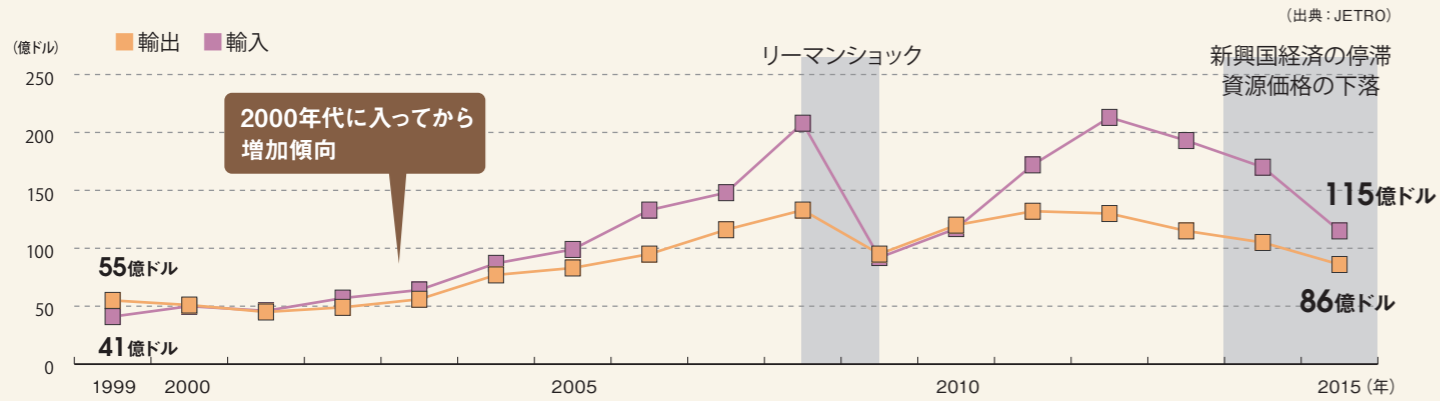
## 特集

# 近づく、アフリカ

54の国がひしめくアフリカは、今や世界でも高い経済成長率を見せる、可能性の大陸だ。特に、成長をけん引する民間企業の発展が、将来の展望を大きく広げつつある。8月にケニアで開催される第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）を踏まえ、新たな局面を迎える日本とアフリカのパートナーシップを考えよう。



## 日本の対アフリカ貿易額の推移

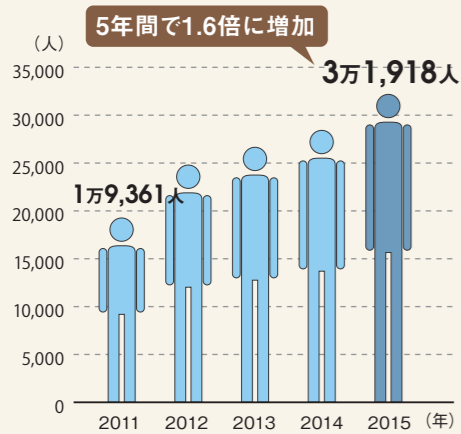


## 人のつながり



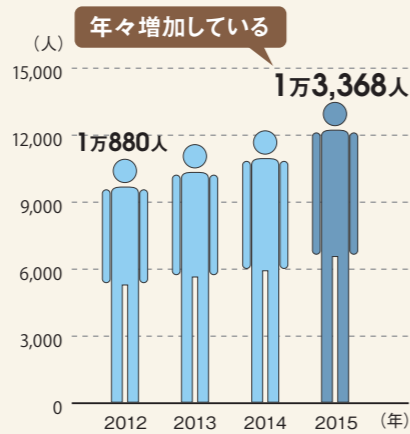
### 日本を訪れるアフリカ出身者の数

(出典: 日本政府観光局 (JNTO))



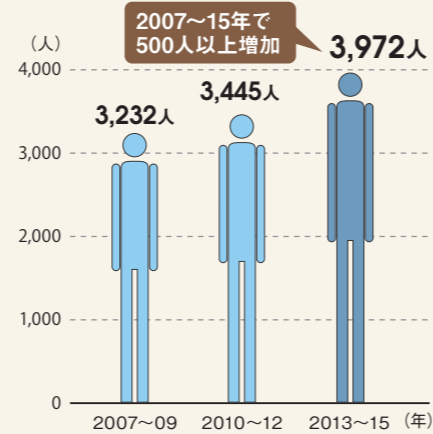
### 日本在住のアフリカ出身者の数

※各年12月末時点 (出典: 法務省)



### 日本へのアフリカ留学生の数

※各年5月1日時点 (出典: 日本学生支援機構)

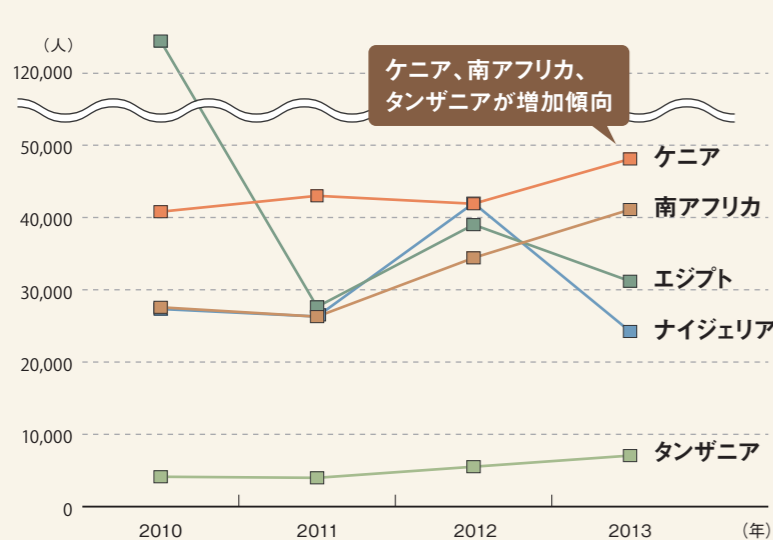


## 人のつながり



### アフリカを訪れる日本人の数

(出典: UNWTO, PATA, 各国政府観光局, 各国統計局 / 作成: 日本政府観光局 (JNTO))



### アフリカ在住の日本人の数

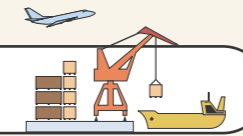
※各年10月1日時点 (出典: 外務省)



## 特集 近づく、アフリカ

# 日本とアフリカの つながりを知ろう!

## 経済のつながり



### 日本企業の動向

※2015年11月時点 (出典: 「アフリカビジネスに関わる日本企業リスト」、アフリカ開発銀行アジア代表事務所・アフリカビジネスパートナーズ)

#### 〔アフリカに進出している日本企業の国別拠点数〕

※一つの企業が複数国に拠点を持つ場合は、その国ごとにカウントする

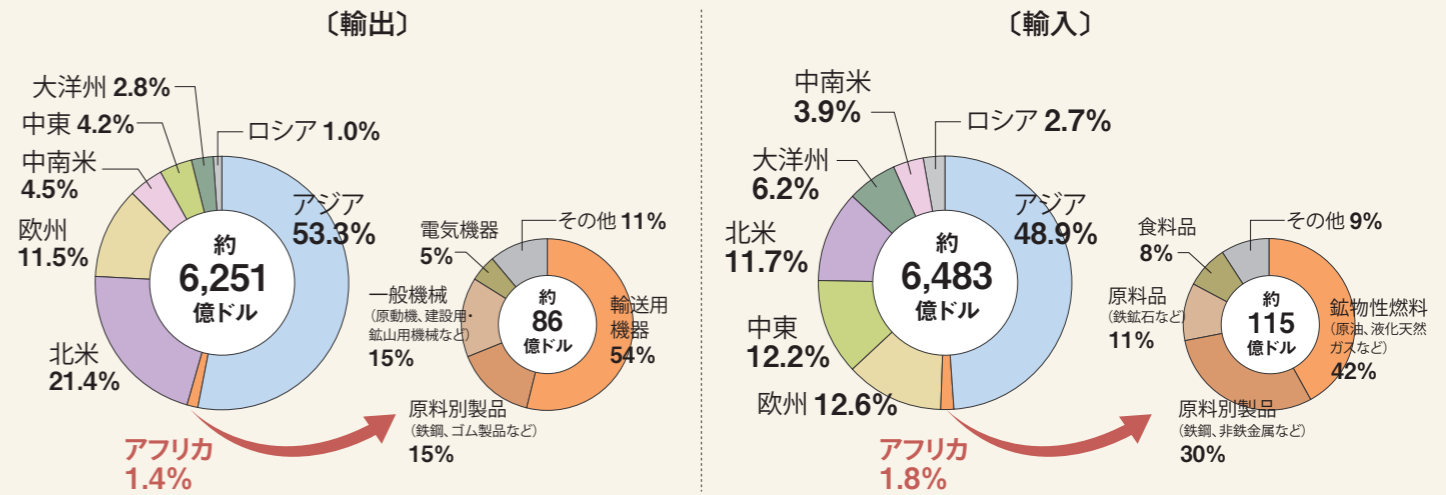
順位	国	拠点数
第1位	南アフリカ共和国	136
第2位	ケニア	40
第3位	エジプト	39
第4位	ナイジェリア、モロッコ	28
第5位	タンザニア	26
合計		440

#### 〔業種別アフリカビジネスに関わる日本企業の数〕

順位	業種	企業数
第1位	一般機械	38
第2位	自動車・輸送用機器	30
第3位	農林水産	29
第4位	電気・電子・情報機器、開発コンサル	26
第5位	専門・中堅商社	23

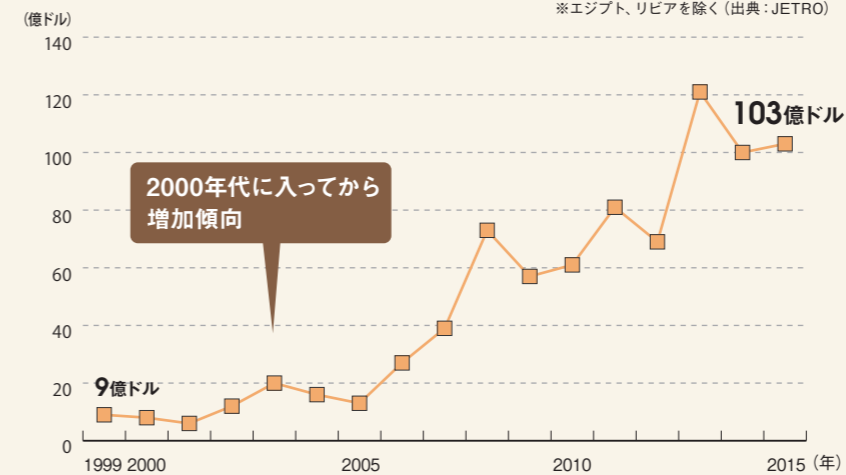
### 日本の地域別貿易額 (2015年)

(出典: JETRO)



### 日本の対アフリカ直接投資残高の推移

※エジプト、リビアを除く (出典: JETRO)



や法律の制約が企業の拡大を妨げていると、平野理事は指摘する。こうした課題を克服するために、アフリカ地域経済共同体 (RECS) をはじめとする経済統合の動きが活発化しており、今後の進展とそれに伴う経済効率の向上に期待が集まっている。それを踏まえて、アフリカで成長するためには、国境の壁を越えて多国籍企業として成長していくことが不可欠だ。そして、これら民間企業や団体の存在が、今後の開発協力と、アフリカの再成長の鍵を握っている。

福岡賢二副学長は、「私たちが目指すのは、社会の課題を自ら発見し、ICTと人間力で解決に導く『探究型人材』の育成です。課題を認識し、解決のための仮説を立てる。その上で、必要な技術や人材、ビジネスモデルを検討する。『探究ブラクティス』の手法を学生たちは身に付けるのです」と説明する。ABEイニシアチブの開始以前から、アフリカの首都キガリは、幾重にも連なる丘の斜面に広がる。街は独特の地形の美しさに加え、秩序と清潔感を保ち、自分の頭の中の「アフリカ」が現実より二歩も三歩も遅れていたことを知る。わずか20余年前、この地で人口の1割以上もの命が失われる内戦が起きたことは、今は想像に難い。

「私が初めてルワンダを訪れた2009年、アフリカ随一のICT環境を目指して通信網が整備されつつありましたが、それを活用できる人材や組織、企業の育成が課題でした。そう振り返るのは、JICA専門家としてICTを通じた社会・経済開発を支援する山

ら、『アフリカの奇跡』と呼ばれるほどの経済成長を遂げたルワンダ。そんな同国が、2000年代初頭から標榜するのが、ICT（情報通信技術）立国だ。

「このセンサーを指に挟んで、心拍数、体温、動脈血酸素飽和度を測ります。これをスマートフォンに接続し、アプリを利用することで計測値やグラフが見られ、結果も自動分析されます。ヘルスワーカーがデータを病院に送れば、医師による正式な診断もフィードバックされる仕組みです」。

※African Business Educatuion Initiative for Youth



ABEイニシアチブを通じてKICに留学中のルワンダの学生たち。農業や災害対策、アニメなど、さまざまな分野でICTの活用を目指す

## ABEイニシアチブが 神戸に撒いたICT連携の種

実は、日本にもルワンダのICT人材育成を担う機関がある。ICT専門職大学院の神戸情報大学院大学（KIC）だ。ルワンダ出身の12人を含め、現在アフリカ12カ国から計49人の留学生が、ICTイノベーターコースで社会課題解決のための実践的スキルを磨いている。

「ICT（情報通信技術）立国を掲げるアフリカの小国・ルワンダ。同国から多くの若きエンジニアが留学する神戸情報大学院大学は、『ABEイニシアチブ』の受け入れ先の一つだ。同学とルワンダのつながりは、市や地元企業に広がり、ICTで共に未来を切り開くための壮大な連携を展開している。



k-Labに集まるキガリの若者たち。ICT商工会議所の会員企業などから講師が訪れ、週に数回、ビジネスセミナーなども開催される

# ICTで革新を起こせ！ 国を超えた産官学の大連携

ICT（情報通信技術）立国を掲げるアフリカの小国・ルワンダ。同国から多くの若きエンジニアが留学する神戸情報大学院大学は、日本政府がアフリカの産業人材育成のために打ち出した留学プログラム『ABEイニシアチブ』の受け入れ先の一つだ。同学とルワンダのつながりは、市や地元企業に広がり、ICTで共に未来を切り開くための壮大な連携を展開している。



「私が初めてルワンダを訪れた2009年、アフリカ随一のICT環境を目指して通信網が整備されつつありましたが、それを活用できる人材や組織、企業の育成が課題でした。そう振り返るのは、JICA専門家としてICTを通じた社会・経済開発を支援する山

中敦之さんだ。「ICTは、社会・経済開発のツールとして非常に多くの可能性を持っていきます。例えば、携帯電話のアプリケーションはその一つです。ルワンダは資源がなく、工業や農業も発達していません。だからこそ、ICTを強化してあらゆる産業の課題解決に役立て、経済成長の起爆剤にしようと国を挙げて取り組んでいるのです」。

定を支援した。産官学の利害関係者を集め、8カ月間かけてそれぞれのニーズを集約した戦略づくりを徹底。2011年に実現したICT商工会議所の設置は、その成果の一つだ。

ICT商工会議は翌年、若い世代のICT起業家の育成と交流の場として、JICAの支援の下、『k-Lab』を設置した。大学生などが起業し、ビジネスとして成功しつつあるなど、ICT人材が着実に育ちつつある。



FabLabの3Dプリンターで農業用の土壌測定器の試作品を作る学生。世界各国のFabLabは、ネットワーク化により知識やデザインを共有している。ものづくりの国際標準化が進む

利益の20%を継続的にHeHe Labsに還元する仕組みだ。  
代表取締役のクラリス・イリバギザさんは、現在KICに留学中のムガルラさんと共同で2010年にHeHe Labsを設立。二人は、2012年にJICAの支援を受けて、KICで2カ月間の研修を受けている。「KICで学んだ探究プラクティスの手法をHeHe Labsの社員や起業家たちに伝えていきます。イノベーションは、誰からでも生まれ得るもの。それを後押しするには、若い世代ができるだけ早いうちから支援を受けられる環境を整えることが重要なのです」と、クラリスさんは強調する。

田中秀和代表取締役は、ルワンダとのオフショア開発事業の先駆者だ。田中さんは、「知人にルワンダのエンジニアを紹介されたことがきっかけでした。アプリ開発のパートナーとして、仕事の一部を彼に委託してみると、技術力と仕事の仕方の両面で、日本の要求水準と一緒に仕事ができるポテンシャルがあると分かったのです」と話す。  
田中さんは、このオフショア開発事業を進展させるため、2014年にキガリにWireless In社を設立。パートナーのルワンダ人のエンジニアが同社の代表取締役を務める一方、田中さんはその日本支社を運営する。Wireless Inキガリ本社でインターンをする現地の大学生の中には、同社の推薦を受けて、ABEイニシアチブに応

募する例が少なくない。彼らは、日本の修士課程で学ぶ傍ら、Wireless In日本支社でインターンをし、帰国後はキガリ本社をはじめとするICT企業で、プロのエンジニアとして羽ばたくのだ。  
5月12日、ICT起業家を目指す若者を支援するk-Labの隣で、FabLabが開所式を迎えた。FabLabは、製品の試作品などを作るのできるものづくりの場。社会課題の解決に寄与する事業のアイデアを生み出すk-Labと連動し、相乗効果を上げることが期待されている。また、製造業では製造工程のデジタル化が進み、ものづくりにおけるソフトウェアとインターネット利用の重要性が増しているという。  
100人を超える関係者が詰めかけた開所式では、3Dプリンターやレーザーカッターなどを使い、地元の若者たちがオリジナルの製品作りにいそしんでいた。  
これら多方面の取り組みで若者のイノベーションを後押しするルワンダ。その知見をアフリカ諸国に移転すべく、同日、キガリで有識者による意見交換会が開かれた。世界経済フォーラム（ダボス会議）アフリカ合会のカイロ・イベントとしてJICAが主催したこの会合には、日本側からは山中専門

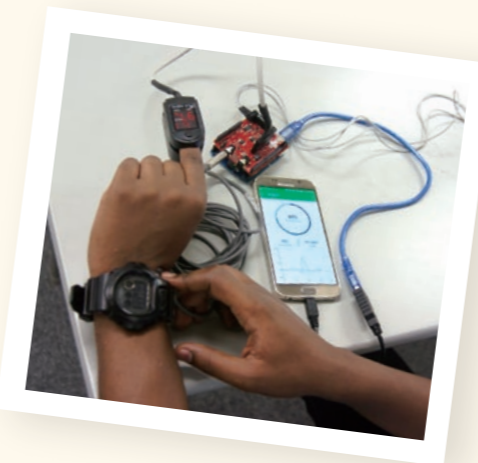
家や久元市長、ルワンダからはクラリスさんやICT商工会議所のアレックス・ナタレ所長、関係省庁の大臣などが参加。さらに、FabLab提唱者のマサチューセッツ工科大学の教授も出席するなど、国を超えて産官学の主要な関係者が一堂に会した。  
会議の冒頭、「アフリカ諸国が経済成長を維持・拡大するには、ICT強化が必須です」とクラリス・ガテテ財務・経済計画大臣。久元市長も、ABEイニシアチブを通じた人材育成協力は、アフリカ諸国とルワンダ、双方のICT振興に寄与するものであると強調した。  
神戸市は今、ルワンダやアフリカに関するビジネスセミナーなどを積極的に主催している。さらに、KICと地元ICT企業が連携し、ルワンダのICT分野の教師向けに、実践的な技術を教授するサテライト授業を展開する計画もあるという。  
「ABEイニシアチブを通じた神戸市とルワンダの大連携は、志と役割認識を持った両国の多様なアクターによって、自ずと築き上げられてきたものです。留学生にとっては、卒業してからが本番です。社会の「困った」を、思い描いた仮説で検証し、解決に導いてほしいと思います」。そう語る福岡副学長は、このICT連携が生む可能性あふれる未来を確信していた。

HeHe Labsで名刺交換するルワンダの起業家と日本側のICT企業代表。今回の視察は、新たなビジネスチャンス発掘の機会となった



5月11日、キガリにあるHeHe Labsの一室に、神戸市視察団の姿があった。久元喜造市長や福岡副学長をはじめ、市やKIC、神戸市内のICT企業などから計16人が、ルワンダとのICT連携の可能性を探りに視察に訪れていた。

ICTで未来を切り開く。その共通目標の下、神戸市とルワンダは両者の産官学を歯車に、大連携を展開し始めている。目指すは、多様なアクターの相互作用で革新を生み出す環境、イノベーション・エコシステムへの構築だ。

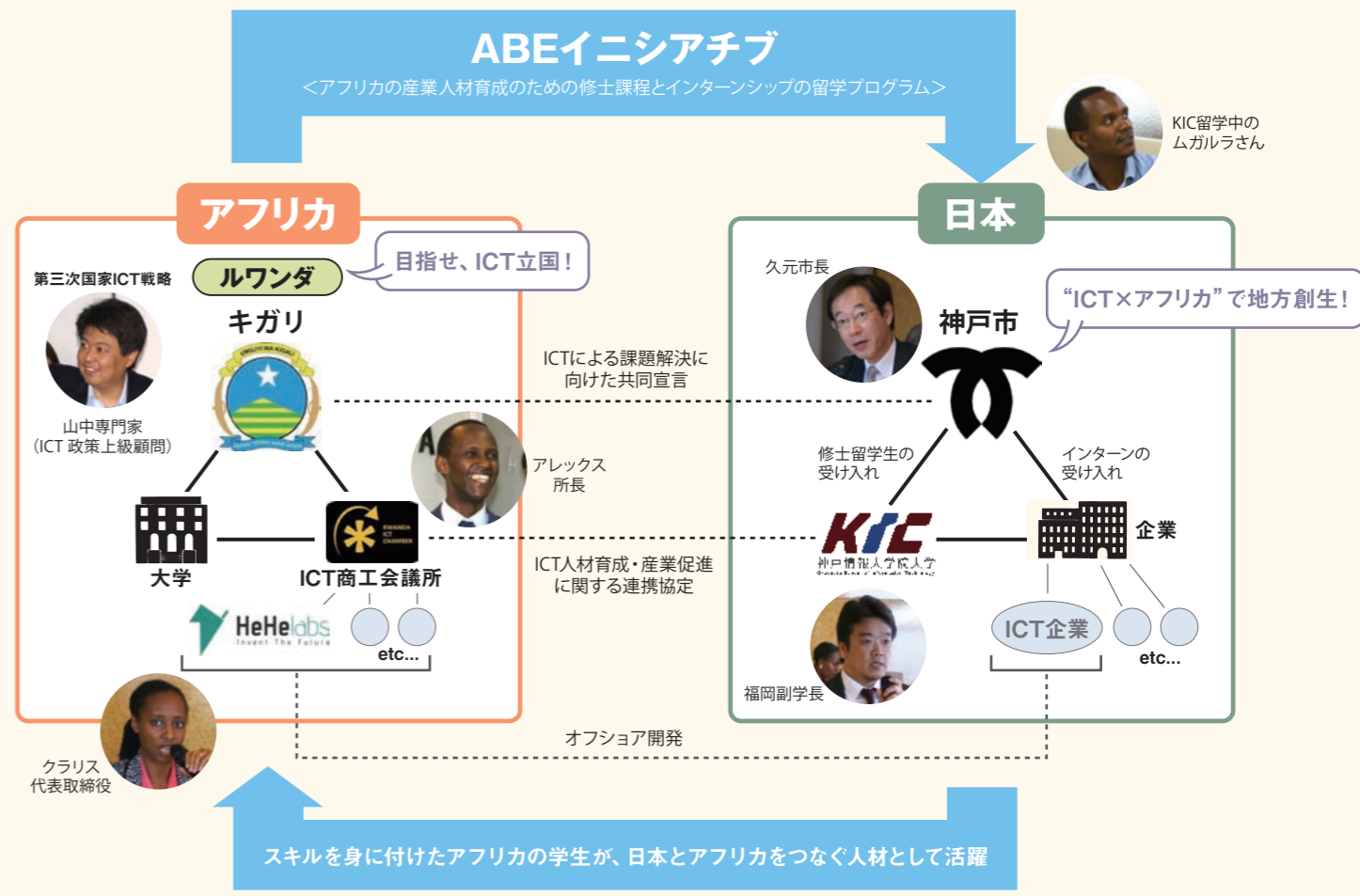


ムガルラさんがKICで研究・開発を進める、健康状態の初期診断アプリケーション。今年2月に母国ルワンダの地方部を視察した結果、クリニックでの利用の可能性もあることが分かった

インターンシップでKICの留学生を受け入れたことで、ルワンダが雷大国であることを知った。そこで、同社は避雷器の設置を現地で行おうと検討を始めた。将来的には、HeHe Labsが同社と組み、雷の事前警報システムを展開する構想もあるという。  
ABEイニシアチブを通じたKICとルワンダのつながりは、今では神戸市や地元ICT企業などをも巻き込む動きに広がっている。同市は「神戸創生戦略」の中で、次代の基幹産業振興にまつわる事業の一つとして、アフリカとの経済交流を掲げており、今年5月には神戸市とキガリの間で、ICTによる課題解決に向けた共同宣言が発表された。

「僕たちが提供する物流ソリューションのアプリを使えば、GPS（測位システム）を搭載したトラックの位置情報をリアルタイムで追跡できます。運転手とも連絡を取れるため、物流の効率性改善に役立ちます」。説明が終わると、青年と神戸市のICT企業代表者らが名刺交換を始めた。  
HeHe Labsは、アプリ開発で自社事業を展開する傍ら、高校生を含む起業家の卵たちに技術的な指導や事業化に向けたアドバイスなどの支援も手掛けている。晴れて起業に成功した場合は、事業

■ABEイニシアチブを通じた神戸市とキガリのICT連携



新ナイル架橋の起工式で、和太鼓の演奏を披露する自衛隊の隊員たち



土のうを使用して道路を修繕する様子



**復興を支える生命線 技術を伝えるながら整備する**  
「当初、MOP I 職員のモチベーションの低さに面食らいました。

その際、予算や技術不足の問題を抱える同国政府に代わり、自衛隊が老朽施設の撤去作業にあたったことで、予定通り建設工事に着手することができたのだ。  
ジュバ市における道路の維持管理能力を強化するプロジェクトでも、PKOとODAの連携が実現した。南スーダンではほとんどの道路が舗装されておらず、雨期には至る所で冠水が起きていた。そ

の背景にあったのが、国内の幹線道路の整備を担当する運輸道路橋梁省(MTRB)と、ジュバ市内の道路整備を担当する中央エクアトリア州インフラ省(MOP I)が弱い弱であること。そこで、このプロジェクトでは両省の人材育成に主眼を置き、道路の点検、設計、維持、修繕工法などの技術移転に加え、道路行政に関する政策やマニュアル作りを支援することになった。

背景には、給与の遅配や、予算不足により職員が工事の経験を十分に積めないといった、国の構造的な事情があります。こう話すのは、プロジェクトで施工管理に関する技術指導を担当した、開発コンサルタント企業勤務の梅田典夫さんだ。梅田さんは、職員の意識を高めようと日々説得を続けながら、道路の品質管理や施工管理の技術やノウハウを伝えた。また、自衛隊の隊員たちもMOP I 職員と協力しながら、地盤や排水溝の整備などを行った。そんなある日、職員の目の色が変わる瞬間が訪れた。「完成した横断歩道を地元の子どもたちがうれしそうに渡っている姿を見てから、彼らのモチベーションが上がりはじめたのです」と梅田さんは振り返る。  
道路インフラの整備を国の経済成長につなげるために重要なのが、新ナイル架橋の建設だ。ジュバ市から、ウガンダの首都カンパラ、ケニアの首都ナイロビ、さらにケニアのモンバサ港までを結ぶ国際幹線は、復興を支える生命線とも言えるが、ジュバ市に至るにはナイル川を越える必要がある。ところが、ナイル川に架かる橋は、一カ所のみで、老朽化も進んでいる。物流や投資を促進するため、また、人口増加のペース

がこれから加速すると見込まれている同市内の交通渋滞を緩和するためにも、新しい橋の建設が急務となっている。  
現在、2018年中旬までの完工を目標に、総延長560メートルの橋の建設が進められている。常駐監理者を務める梅田さんは、「現場の地質条件は予想以上に難しい」と話す。施工業者と協力しながら工程の効率化などに取り組んでいる。建設にあたって約200人の現地スタッフの雇用が生まれており、梅田さんは、日々の業務の中でスタッフに対する技術移転がきちんと行われるように心掛けていくという。また、市内の大学に通う土木工学科の学生を対象に、実際の建設現場を見て土木技術や施工方法について学んでもらう研修機会も設けている。  
トンネルの開通や水路の完成など、さまざまな国で心揺さぶられる場面に立ち会ってきた梅田さんは、「架橋建設の進捗状況やその日の作業を考えると、毎朝起きるのが楽しみなんです。橋が完成した達成感を味わえる日が来るのが待ち遠しいです」と語る。  
世界で最も新しい国の平和と安定のために——。応急的な復旧支援を行うPKOと、持続的な社会の実現を目指すODAとが一体となった、オールジャパンによる国づくりが進められている。

ナイル架橋の建設現場には、地元の小学生たちが社会科見学にも訪れる



長年にわたる内戦を経て11年に独立を果たした南スーダンでは、国内の政治的な混乱の解決が大きな課題だ。「平和と安定の実現のため、国際社会全体が協力して取り組む必要がある」という考えの下、日本は同国に自衛隊の派遣を続けており、現在300人以上が活動している。国連平和維持活動(PKO)とODAの連携が始まるきっかけとなったのが、JICA事業として首都ジュバ市の浄水施設の拡張などを支援したこと。

建設が進む新しいナイル架橋。南スーダンの経済成長につながることを期待されている



自衛隊と連携してジュバ市内の道路の補修工事を実施。自衛隊が所有する重機を使用した



平和と安定のために  
自衛隊と連携する意義

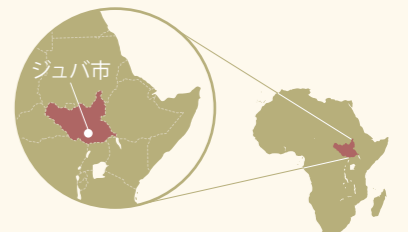
南スーダンを流れるナイル川に、新たな橋を架ける——。2012年に日本の協力の下に始まったプロジェクトは、本格的な工事が始まろうとしていた矢先、紛争の発生により中断を余儀なくされた。それから約1年後の昨年3月、多くの人々が待ち望んでいた建設工事がようやく再開された。

起工式には、同国の大統領や大臣らをはじめとする400人以上が出席し、注目度の高さをうかがわせた。そんな中、躍動感あふれる和太鼓の演奏で会場を沸かせたのは、日本の自衛隊から派遣されている隊員たちだ。実は、彼らはさまざまな政府開発援助(ODA)事業と連携を図り、同国の「国づくり」を支援してきた。

from 南スーダン  
**South Sudan**

## 国づくりを象徴する希望の橋

2011年にアフリカ54番目の独立国として誕生した南スーダンは、長年にわたる内戦の影響により、インフラの整備が立ち遅れている。国際社会が一丸となって同国の「国づくり」に取り組む中、日本は自衛隊とも連携したオールジャパンによる協力を続けている。







日本の協力で建てられた野口研のP3ラボ(上)。入り口には野口英世のレリーフがある(下)

野口研のP3ラボ(上)。入り口には野口英世のレリーフがある(下)

同国で飼育されるニワトリからの高病原性鳥インフルエンザH5N1の同定などの実績を持つ。2014年に西アフリカで発生したエボラウイルス感染症のアウトブレイクでは、世界保健機関(WHO)のアドバイザーとして発生地であるギニアのコナクリに派遣された、感染症対策のスペシャリストだ。

東京医科歯科大学で博士号を取得し、JICAと長年手を携えて同国の感染症と闘ってきたアンボ

フォ教授は、「99年にP3ラボができたことは、感染症の研究・対策にとって画期的でした。エボラウイルスの大流行でも、ガーナのみならず周辺の国から検体の分析を引き受けることができました。結果的には全て陰性だったとはいえ、対応に貢献できました」と語る。同じく西アフリカで流行するラッサ熱についても、野口研が周辺国の検体を一手に引き受けることで、まん延を早期に食い止める役割を果たしている。

今後、日本とガーナは、野口研のさらなる活動範囲の拡大に向けて力を合わせていく。新たなBSL-3実験室を含む最先端の感染症研究センターを新築するほか、感染症の動向調査体制の強化に向けて日本の大学や病院、国立感染症研究所と共に共同研究も始めている。

感染症の危険から人々を守るために、野口英世の遺志を継いだ協力は続く。

「ガーナでは、雨期に入ると例年、コレラが大流行するのです。コレラの感染は、主に排せつ物に混じった菌が何らかの形で水や食物を汚染し、それが人間の口に入ることになります。雨期になると下水が雨水であふれて、上水道と混ざってしまい、流行経路の一つになっているので、下水の整備が急ピッチで進められています。」

そう話すのは、現在、同国の公的保健医療サービスを担う「ガーナ保健サービス」でアドバイザーを務める青木恒憲さんだ。「ガーナに限らず、アフリカでは患者数や症状を政府が迅速に把握できるようなサーベイランス体制が確立されていないため、流行が始まっても対策が遅れがちです」

日本は国民皆保険制度をはじめとする医療制度が整備されている。さらに、これまでに狂犬病やマラリア、コレラなど、数々の感染症撲滅を実現してきた。積み重

ねてきた知識と経験を共有することは、アフリカの人々を感染症から守る一助となる。そして、西アフリカで日本の知見を共有する拠点となっているのが、野口記念医学研究所(野口研)だ。

JICAは今から50年前の1966年に、医療協力調査派遣団を送り込んだのを皮切りに、基礎医学分野でガーナが独自の研究業務を手掛けられるようになることを目指して、さまざまな協力を積み重ねてきた。79年にはガーナ大学医学部付属機関として野口研を開設。以後、日本各地の大学や研究機関の協力を経て、ウイルス学や感染症、免疫学など、多彩な分野の技術協力を展開してきた。支援初期には、野口英世の出身地という縁から福島県立医科大学が協力の中心となり、東日本大震災の際には野口研の有志が被災者にガーナ産のチョコレートを贈るなど、日本とのつながりは深い。

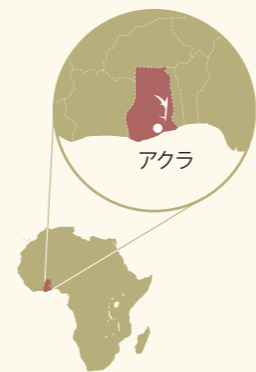
### インフルからエボラまで 西アフリカの観測塔

数ある協力の中でも、99年に開設されたバイオセーフティレベル3(BSL-3)実験棟、通称P3ラボは、長年、西アフリカで唯一の封じ込め実験室として、近隣各国を含む西アフリカ地域の感染症対策の要となってきた。

「今年、ガーナでは、サハラ砂漠以南のアフリカ中部に多い細菌性髄膜炎が流行し、感染疑いがある人は2000人を超えました。その際、流行している細菌の種類を同定して、さらなる感染拡大を食い止めたのが、野口研です」と青木さんは語る。

フォ教授は、「99年にP3ラボができたことは、感染症の研究・対策にとって画期的でした。エボラウイルスの大流行でも、ガーナのみならず周辺の国から検体の分析を引き受けることができました。結果的には全て陰性だったとはいえ、対応に貢献できました」と語る。同じく西アフリカで流行するラッサ熱についても、野口研が周辺国の検体を一手に引き受けることで、まん延を早期に食い止める役割を果たしている。

雨期のスコールは激しく、道が水たまりになることも



アクラ

赤道付近を中心に、アフリカや中南米のいくつかの国には、一枚の黄色い紙がなければ出入りすることができない。見た目通りに「イエローカード」と呼ばれるこの紙は、黄熱病の予防接種証明書だ。黄熱病は野口英世の命を奪った病だと言え、びんと来る人もいるだろう。蚊を介して伝染し、発症すれば死亡率は2割を超える危険な病だ。しかし、アフリカで流行している病気はこればかりではない。

### 日本人の名を冠する研究所 アフリカの病と向き合う



野口研で多くの感染症に立ち向かってきたアンボフォ教授



地域保健師詰め所の掲示板。担当区域の年代別住民数などに並んで、マラリアやギニアワームなどの啓発ポスターが貼られている

from ガーナ  
Ghana

## 感染症対策の最前線で

2015年のノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智さん。その業績を代表するイベルメクチンの発見と開発は、アフリカや南米の多くの人を失明の危険から救ったが、他にもアフリカの人たちがさらされている危険な感染症は多数ある。西アフリカにおける感染症対策の最前線が、ガーナにあった。

ケニア

株式会社ジー・イー・エス

電解水で病院の衛生環境を改善

「アフリカの子どもたちに安全な水を届ける」という企業理念のもと、1989年に設立した株式会社ジー・イー・エス。91年にコンテナ型の浄水装置をケニアに寄贈して以来、飲料水だけでなく、さまざまな分野の取り組みを同国で行ってきた。その一つが、同社が開発した除菌効果の高い中性電解水を活用した手指洗浄装置を、キムス市内の病院に取り付け、衛生環境の改善を目指すプロジェクトだ。

妊産婦と5歳未満児の感染症による死亡が問題となっているケニアでは、病院のスタッフが手を洗う際、きちんと消毒手順を踏んでいないという実態があった。そこで、同装置を新生児室や小児科など4カ所に設置し、手洗いの手順や改善策について指導するワークショップを行った。この他、大型の電解水生成装置も設

置し、病棟を清掃する際の霧吹きや拭き取りなどに活用している。今後は他の病院への展開も視野に、同社独自の電気分解処理技術の普及を目指す。



電解水を活用した手指洗浄装置で手を洗う病院スタッフ

モロッコ

株式会社鳥取再資源化研究所

特殊な節水技術で農業を支援

「農業が国の経済にとって重要な位置を占めるモロッコでは、乾燥地域が多い上、気候変動による降水量の減少も見込まれていることから、水の持続的な利用が課題となっている。野菜の生産が盛んなス・マッサ地域では、少量の水を効果的に使う点滴灌漑が普及しているものの、水不足の解消には至っていない。こうした中、同地域の節水に期待がかかるのが、株式会社鳥取再資源化研究所が開発した土壌改良材「ポーラスα」だ。ポーラスαは廃ガラスを原料とする同社独自の多孔質素材で、土壌に混合して使用すると、多数の細孔に水が蓄えられて土壌の保水性が高まる上、環境負荷も少ない。

昨年、現地の農業開発公団の試験農場でトマトとインゲンの試験栽培を行った結果、いずれも必要な水量を半分に削減させる

ことに成功。収穫量もそれぞれ20%以上増加した。今年の夏は、現地農家の畑でも試験利用が始まる。対象作物の拡大や、ポーラスαの現地での製造・販売体制の構築も目指していく方針だ。



試験農場でのトマトの苗の植え付け

ザンビア

株式会社ジャパンバイオフィーム

土壌・肥料に関する知見を生かす

「ザンビアでは、全人口の6割以上が農業に従事しているが、1ヘクタール程度の小規模農家が圧倒的に多く、農村部の貧困率は高い水準にある。株式会社ジャパンバイオフィームは、日本国内で培った土壌分析や施肥設計に関する知見を生かし、こうした小規模農家の生産性の向上を目指すプロジェクトを行っている。

現地では、化成肥料の効果が発揮されない特性を持つ土壌が広範囲に存在するため、プロジェクトでは化成肥料に鶏糞を組み合わせた栽培試験が行われている。また、農業技術を広く普及する体制を整えるため、ワークショップやニーズ調査も進められている。同国の1ヘクタールあたりのトウモロコシ収穫量の平均が2.5トンなのに対し、指導を受けた農家の中に10トンの実績を上

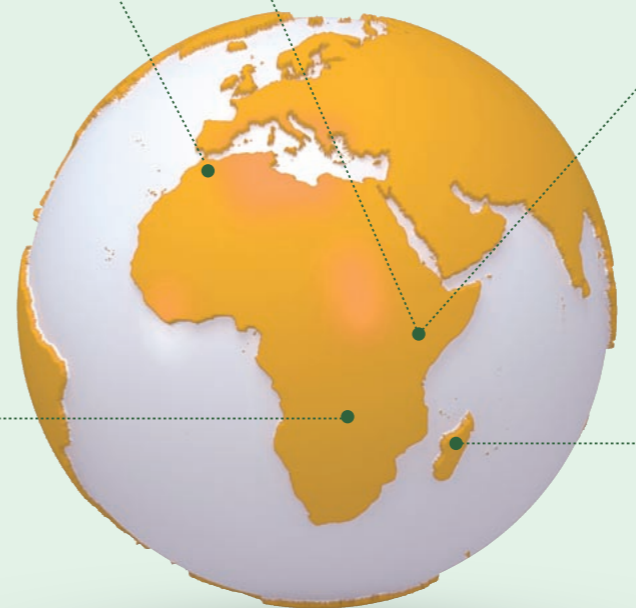
げた例や、小規模農家から10ヘクタール程度の中規模農家に成長した例もある。農家に対する肥料の前渡しシステムなど、農業技術の普及制度を実用化することが同社の目標だ。



現地の水田で行われた生育調査

近年、新たなビジネスチャンスを見出そうとする企業が、アフリカに熱い視線を注いでいる。日本で培った技術やノウハウを生かして、アフリカでビジネスの視点を盛り込んだ開発協力を展開している5つの企業を紹介しよう。

可能性の大陸に挑む企業



ケニア

株式会社キャンサーキャン

“ヘルシーキオスク”で生活習慣病予防

「日本と世界の公衆衛生の向上を目指して設立された株式会社キャンサーキャンは、がん検診の受診率向上に向けたマーケティングに取り組んできた。同社がアフリカに設立した子会社アフリカキャンでは、ケニアに進出する日本企業の支援と並行して、「ブルースプーン

キオスク」と呼ばれる雑貨小売店を運営して、一般消費者の消費行動を分析している。

その中で見えてきたのは、炭水化物や砂糖の消費が多く、生活習慣病のリスクが高まりつつあることや、それを受けて「スリムになりたい」と思う人が増えてきたことだ。そこで、ブルースプーンキオスクをハブに無料の簡易健康診断や運動クラブを始めたところ、予想以上に肥満・高血圧が多いことが分かったという。

ケニアの人々にとっても健康診断や運動の機会は貴重で、人の集まりは上々だという。そこで、健康診断や運動クラブに加えて、健康に良いお茶の販売やダイエットコンテストなど、さまざまな試みを行っている。今後は健康の拠点“ヘルシーキオスク”として、健康促進とビジネスの両立を目指す。



地元の人たちの生活を支えるブルースプーンキオスクで、健康も支えることを目指す

マダガスカル

有限会社テオブロマ

産地直送ショコラを日本へ

「国内外で修行を積み、1999年、代々木に「ミュゼ・ドゥ・ショコラ テオブロマ」を開いた土屋公ニシエフ。世界各地のカカオ農園を視察する中で、小規模農家の生計向上と高品質のカカオ豆の調達を両立させたいと考えるようになった。

カカオ豆の流通は大手企業が一括で担っていることが多い。ショコラティエが直接農園からカカオ豆を買う仕組みができれば、農家はより高くカカオ豆を販売し、ショコラティエは出所と品質の確かな豆が得られる。

「カカオ豆の味は収穫後の発酵が決め手。小規模農家が集まって組合を作り、発酵を共同で管理すれば、まとまった量の高品質カカオ豆が生産できます。自分で豆からチョコレートを作るショコラティエが増えつつある

今、品質の高いカカオ豆の需要も増えています。農家が良いものを作れば、高く売れるのです」と土屋ニシエフは語る。

マダガスカル産のカカオ豆で作ったチョコレートは鮮やかな酸味があり、食べた後にドライフルーツのような後味が残る。神々の食べ物と呼ばれた美味を通じて、二つの島国がつながる。



マダガスカル農園を訪れた土屋ニシエフ



ブケディア地区の女性たち。都市と都市の間において経済成長から取り残されているのが、この地域の課題だ

リン氏が、1993年、友人たちと共に立ち上げた、農家の収入向上と女性の自立支援を目指す団体だ。函館在住のウガンダ人、ドミニク・バゲンダさんが帰国時にPKWIを知り、その活動に共感して協力するようになった。岡田さんにPKWIを紹介したのもバゲンダさんだ。

岡田さんは、外務省のNGO海外スタディー・プログラムを利用して2013年にウガンダを訪問。3カ月間、PKWIで研修を受けたことがきっかけで、バゲンダさんと共にPKWIを支援する会を立ち上げた。

PKWIは、農業支援が中心なので、地元の人やコミュニティとの連携や、自分たちの力でプロジェクトを進める体制は整っていた。PKWIを支援する会ではその基盤を活用して、女性の自立

を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。

「ウガンダの女性たちの多くは、若くして結婚していたり、未婚でも子どもを持っていたりしますが、収入を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。

### 草の根で広がる支援の輪 子どもたちの勉強のために

岡田さんが気に掛けているのは、女性たちが洋裁教室で学んでいる間、その子どもたちの世話をしている少女たちのことだ。少女たちは、ベビーシッターの仕事に時間を取られるため、結果的に学校に行くことができない。母親たちが

を中心として協力を進めている。軸となるのは、洋裁教室による職業訓練だ。

洋裁教室は、3カ月間のコースを年3回開催し、これまでに20人が卒業した。しかし、技術を身に付けても、収入につなげなければ自立はできない。そこで始めたのが、レンタルミシン事業と、地域の学校の制服作りだ。

昨年からは始めたレンタルミシン事業は、女性たちにミシンを貸し出して、マキエットなどがたくさん集まる場所で服の修繕などを請け負い、収入につなげてもらうプロジェクトだ。だが、ミシンを移動させるのにもお金がかかる。そこで、学校の制服作りを請け負うことにした。ウガンダではどの学校にも制服があるので、安定した需要が見込めると考えたのだ。良い品質の布で、丁寧に、質の高い制服を作る。収入は洋裁教室とレンタルミシン事業の運営費に充てると同時に、女性たちにお金が稼げることを実感してもらっている。

バゲンダさんは「お金や物資ではなく、道具と技術の訓練を提供することで、女性たちが自分自身で問題を解決する手助けをしたいのです」と話す。

自立できれば、少女たちも学校に行くことができるようになるのでは。岡田さんは、そんな変化にも期待している。

現在、公立はこたて未来大学で教壇に立つバゲンダさんは、毎年、学生を連れて現地へのスタディーツアーを行っている。昨年9月には、ブケディア地域でも特に貧しい村の小学校でボランティア活動を行い、給食を作って子どもたちに振る舞うと同時に、地元の有識者を招いて現状を視察してもらった。

「その村の学校は、木と土で簡易的に作られたもので、雨が降ると水が入ってきて授業が続けられなくなってしまう。また、子どもを学校に通わせるより、近くの沼で魚を捕ってお金を稼がせたいと思っている親もいます。現状を変えるためには、ただ給食を作ってあげるだけでなく、地元の人々が教育について話し合う機会が必要だと思っています。スタディーツアーに参加

し、現在はPKWIを支援する会の一員として活動している岡崎航さんと西谷謙吾さんは、ウガンダでの経験をそう振り返る。

バゲンダさんは「地元の有識者が村の現状を見たことで、自治体が校舎の整備に乗り出しました。日本のボランティア活動がウガンダを動かし、一方で日本からの参加者も新しい価値観を学んでいます。少しでも多くの人に、アフリカを自分の目で見てほしいと思います」と、活動の意義を強調した。

岡崎さんは、この春にも洋裁教室の現状調査のために現地を訪問し、寄付で集まった文房具をブケディアの小学校に届けた。教科書も筆記用具も足りない村の子どもたちの勉強を少しでも支えたいという。

女性や子どもたちが自立して、幸せな生活を送り、夢のある未来を築ける日を目指して、支援は続く。

し、現在はPKWIを支援する会の一員として活動している岡崎航さんと西谷謙吾さんは、ウガンダでの経験をそう振り返る。

バゲンダさんは「地元の有識者が村の現状を見たことで、自治体が校舎の整備に乗り出しました。日本のボランティア活動がウガンダを動かし、一方で日本からの参加者も新しい価値観を学んでいます。少しでも多くの人に、アフリカを自分の目で見てほしいと思います」と、活動の意義を強調した。

岡崎さんは、この春にも洋裁教室の現状調査のために現地を訪問し、寄付で集まった文房具をブケディアの小学校に届けた。教科書も筆記用具も足りない村の子どもたちの勉強を少しでも支えたいという。

女性や子どもたちが自立して、幸せな生活を送り、夢のある未来を築ける日を目指して、支援は続く。



服の直しなどの針仕事を引き受けて収入につなげ、女性たちの自立をサポートするのが、現在の目標だ

女性たちが作り上げた型紙。これを使って小学校の制服が作られる



コンテナを改造して作った教室兼作業場。ミシンは昔ながらの足踏み式だ



### 収入のない女性たち どうすれば自立できるか

アフリカ東部の内陸に位置するウガンダ。4000万人弱の人口を擁するこの国は、近年、サハラ以南アフリカでも順調な経済成長を記録している国の一つだ。しかし、その恩恵が全ての人たちに平等に行き渡っているとは限らない。

「ウガンダの女性たちの多くは、若くして結婚していたり、未婚でも子ども

を持っていたりしますが、収入を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。

「ウガンダの女性たちの多くは、若くして結婚していたり、未婚でも子どもを持っていたりしますが、収入を得る手段がないことが多いので、親戚の家で家事を手伝ったりして生活しています。収入を得て自立したいと思っています。収入は多いのですが、自分たちに何ができるのかわからず、踏み出せないでいるのです。そう話してくれたのは、「PKWIを支援する会」の立ち上げメンバーの一人、岡田朋子さんだ。



国際協力の担い手たち

## PKWIを支援する会 ミシンで作る女性の自立

多くの女性たちが若くして結婚したり、子どもを産んだりしているウガンダ。女性が生計を立てる手段が少ないため、意に沿わない環境での生活を余儀なくされる人も多い。ケニア国境に近いウガンダのブケディアでは、洋裁教室を通して女性たちの自立支援活動が展開されている。

## 世界を直接体験することが正しい理解につながる

6月初め、玉川学園の高学年校舎では、放課後の教室に生徒たちの声が響いていた。

「ちゃんと仕事に就いていても失業する人が多いのはなぜだろう」「今の生活環境で不便に感じていることはあるのかな」

4つのグループに分かれて熱心に話し合っているのは、7月末から12日間、ボツワナと南アフリカ共和国を巡るスタディーツアーに参加する17人の生徒だ。ツアーの一環として、生徒たちがボツワナ大学の学生に対して、「貧困」「人権」「環境」「国際協力」に関する日本の現状や課題を発表し、両国の状況を比較しながら議論するプログラムが予定されている。この日は、その発表に向けた一回目の話し合いが行われた。

「私たちのグループは、環境問題について発表しようと思っています」と話すのは、高等部2年の文屋里菜さん。「環境分野は範囲が広いので、テーマを絞った方が良さ」という先生からのアドバイスを受けて、メンバーそれぞれが次回の話し合いまでに、大気汚染や水質汚濁などのテーマごとに、日本国内の現状を調べてくることになった。「ボツワナは急速に経済発展をしていると聞きました。日本と同じように、その成長の裏で環境問題が拡大していないのか」という点に関心があります」と文屋さんは話す。



ハボローネ近郊にある施設では、ボツワナの伝統的なセツワナ文化を体験した(2014年のスタディーツアー)



南アフリカ共和国ではタウンシップに物資を届け、現地の子どもたちと交流した(2014年のスタディーツアー)

## 世界とつながる教室

connect with  
**Botswana**

ボツワナ



## 自分の目でアフリカを見る

2014年に文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール」に指定された、東京都町田市の玉川学園高等部・中学部。国連機関や国際NGOの職員として国際問題に積極的に貢献できるリーダーの育成を目指して、さまざまな取り組みを行っている。中でも、生徒たちに大きな影響を与えているのが、アフリカを巡るスタディーツアーだ。



ボツワナ大学など現地の学校で発表するテーマを決めるため、グループに分かれて話し合いを行った

スタディーツアーの事前学習の様子。JICA研修員のモロカさんがボツワナ式のあいさつを教えた



## さまざまな出会いとともに価値観が変わる旅

今年で8回目となるツアーの最大の目的は、人に出会うこと。ボツワナの首都ハボローネでは、現地の高校の授業に参加したり寮に泊まったりして、同世代の学生たちと交流を深めるほか、青年海外協力隊の活動も見学する。また、ボツワナのエイズ孤児院や南アフリカ共和国のスラムを訪れ、貧困や感染症といった途上国が抱えている問題について学ぶ機会も用意されている。その一方で、例えれば、舗装されている道路や町中にあるスーパーを見

て、日本との共通点も多いことに気付く。そんな、同じなんだ」という感覚を若いうちから持つことが、何よりも大切だと思っています」と話す。

ツアーの事前学習の日、発表に向けた話し合いに加えて、ボツワナからJICA研修員として来日しているウェドゥ・モロカさんによる出前講座も行われた。「ボツワナ料理の一つに、豆の葉を使ったモロホがあります。味はホウレンソウに似ています。モロカさんがボツワナの文化や産業、食などを紹介すると、生徒たちは興味津々な様子で耳を傾けていた。

また、現地の人と仲良くなるためにも大切なあいさつの仕方を全員で練習した。左手を右肘に添えて握手をしながら、相手が男性なら「ドウメララ」、女性なら「ドウメラマ」というボツワナ式あいさつを試すと、教室内は自然と笑顔で溢れた。最後にモロカさんは、「ぜひボツワナのことを好きになってください。そしてこれから先、留学や仕事でボツワナに行く人が増えたらうれしいです」と語り掛けた。

これまでの参加者の中には、帰国後、他の学生とも経験を共有するための勉強会を開いた生徒や、都内で「高校生アフリカ貧困会議(APYC)」を主催して、専門家による講演会などを企画した生徒もいるほど、スタディーツアーは生徒の意識や行動を変化させるきっかけとなっている。そんな先輩や友人の姿を見て感化されたと話すが、高等部3年の板崎七菜さんだ。「昨年参

加した友人から、人生観が変わった」という話を聞いて、今年のツアーには絶対に応募すると決めていました。ボツワナと聞くと貧しいイメージがありますが、本当にそうなのか。自分の目で見て、さまざまな話を聞いて、その国のことを理解したいと思っています。

遠い存在だったアフリカは、生徒たちの目にどう映るのか。新しい価値観に出会う、成長の夏が始まるとうとしている。



玉川学園ではスタディーツアーの他にも、授業の一環として模擬国連を行っている。毎年、他の高校も含めた100人を超える生徒が参加して、議長や各国の外交代表となり国際問題について議論する

「食用作物・稲作栽培」

宮澤

MIYAZAWA  
Jyoji

譲治

PROFILE

高校卒業後、社会人生活を経て高知大学農学部に入學。研究室では作物栽培を、大学院ではイネを専攻し、大学院とJICAの連携プログラムを利用して青年海外協力隊へ。2014年10月から、当時ベナンに本部機能を移していたアフリカライスセンターや、同国の農村地域で活動中。

研究と協力の両立制度を生かし  
世界の主食「コメ」を育てる

旅が大好きな宮澤さん。高校卒業後、社会人生活でお金を貯めて世界各地を旅していた。長年、体調不良に悩んでいたが、25歳のときにインド在住の友人の紹介で現地の伝統医療による治療を受け、体調が回復したことがきっかけで、自分も人に役立つ仕事がしたいと考え始めた。

自分にできることを探す中で出会ったのが、高知

JICA  
Volunteer  
Story



アフリカライスセンターの同僚たちと、センターのデモ圃場前で

「アフリカのコメ生産を後押ししたい」

近年、アフリカで消費が増えるコメ。栽培面積の拡大によってコメの生産量は徐々に増えているが、需要にはまだまだ追いついておらず、面積当たりの収量の増加が不可欠となっている。宮澤譲治さんは、ベナンで自らもイネを育てながら、アフリカに適した稲作の技術開発のために尽力している。



大学農学部の国際支援学コースだ。農林水産分野の研究や技術協力を通して国際社会に貢献する人材を育てるもので、海外での短期研修や調査を行い、これまでにも青年海外協力隊員を輩出してきた。実家で農作業をしたこともあった宮澤さんにとって、農業は親しみのあるテーマだった。一念発起して受験勉強を始め、28歳で無事、合格。遅咲きの学生生活が始まった。

入学前から青年海外協力隊に興味があった宮澤さん。授業の一環として、タイで農業研修を受けたとき、宮澤さんが特に楽しいと感じたのがイネの試験だった。帰国後は作物栽培の研究室に入り、イネと水に関する研究に没頭した。大学院で勉強を続けるか、協力隊に参加するかを悩んだときに、大学と国際研究機関の連携を推進する農学知的支援ネットワークのプログラムで、大学院での研究と協力隊活動を両立できる仕組みがあると知った。「協力隊員として国際研究機関で活動できれば、職歴にもなりませんし、その成果を修士論文に反映させることもできます。自分のやりたいことがどちらもかなえられると感じて、即座に参加を希望しました」

宮澤さんが派遣されたのは、ギニア湾に面した西アフリカの小国・ベナンに一時的に本部機能が置かれていたアフリカライスセンター（2015年にコートジボワールに移転）だ。ここではアフリカ稲作復興のための共同体（CARD）など、稲作に関するJICA事業や、サハラ以南アフリカの稲作栽培マニュアルの整理と分析、稲作農家の収量要因分析などのほか、実験計画の作成や予備試験も行っている。

宮澤さんの活動拠点はもう一つある。ベナン中部のパパゾメという小さな農村だ。電気も水道も無いこの場所で、宮澤さんはイネの栽培実験を手掛けている。当初は、地元の人に栽培実験の意味が上手く伝わらず、人や牛がいつの間にか農場に入ってきて



a.イネの生育調査は毎週行っている。収量の向上が今の課題だ  
b.綿畑で。農家と共に除草作業を行うことも  
c.地元農家に直接アンケート調査を行い、課題を探る  
d.人間の手か動物の力を借りて田畑を耕す

人口増加に対応するコメの増産  
鍵となるのは単位収量の改善

アフリカでは、人口の増加や食文化の変化などにより、コメの消費量が年々増加している。しかし、雨水に頼った栽培がほとんどで、稲作に向かない地域も多い。栽培面積が増えたおかげでコメの生産量は増えているが、面積当たりの収量が増えなければ需要の増加に追いつくことができない。実際に、2007年から翌年にかけてのコメ価格の高騰は食糧危機を招き、暴動が起こった地域もあった。アジアを中心とした他地域からの輸入に頼らない、自給率の改善は不可欠だ。

宮澤さんは、研究をしていないときは地元の農家と一緒に農作業に励むなど、交流を通してアフリカの農家に必要なものを学び、論文にまとめようと奔走中だ。昨年の経験を踏まえて、より現地の農業スタイルに合わせた実験に取り組んでいる宮澤さんの研究に、地元の農家も興味を持ち始めている。

「この場所に来て一番驚いたのは、膨大な家事や育児を全てこなした上で、私よりも力強く農作業をこなしてしまう女性たちのパワーです」と話す宮澤さん。アフリカの農村でたくましく生きる人々に刺激を受け、いつかは自分でもおいしい農産物を人々に届けたいと思い始めた。だが今は、少しでもアフリカの人たちの役に立とうと目の前の研究を続けている。

### アフリカの貧困削減に貢献したい

先進国と開発途上国の格差の問題を問い続けてきた吉澤啓さんは、長年、アフリカの貧困削減に携わってきた。第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）の開催を前に、アフリカ支援にかける思いを新たにしている。

#### アフリカと共に歩んできた JICA 人生

私が JICA に就職を決めたのは、学生時代から、先進国と開発途上国の格差を解決したいと思っていました。開発援助は、政治や経済、社会、科学技術など幅広い分野に横断的に取り組むことができるので、その点も魅力でした。

JICA に就職して約30年、これまで、アフリカ部、企画部、モロッコ事務所、青年海外協力隊事務局、旧通産省・OECD/DAC 事務局への出向など、さまざまな部署と業務を経験してきました。キャリアの半分を超える20年間はアフリカと共に歩んできたと言えるでしょう。

アフリカが貧困を極めていた1990年代初頭、私はニジエールやシエラレオネ、ルワンダなどの西アフリカ・中部アフリカ地域を中心に担当していました。このころは、日本国内ではまだまだ現地の情報が手に入りにくかったのですが、現地、それも地方部の奥地まで足を運び、人々の暮らしや貧困の実態を見てきました。その原体験が、今のアフリカ支援業務の活力につながっているのだと思います。

旧通産省出向の後には、第2回アフリカ開発会議（TICAD II）の担当、OECD/DAC 事務局への出向など、貧困解決に向けた援助政策の動向分析や事業の計画立

案といった開発の上流部分に携わることが多くなりました。

#### 根本的な貧困削減でアフリカに希望を

現在、アフリカ部で私が担当しているのは、マクロ経済や開発政策、援助政策の動向分析、TICAD で打ち出すイニシアチブや数値目標の検討・進捗把握などです。また、この8月に、ケニアの首都ナイロビで TICAD VI が開催されるので、今はその準備に注力しています。

TICAD が始まった90年代初頭、日本国内のアフリカ地域への関心は低く、援助業界の中でも TICAD に注目する人は多くはありませんでした。それが現在では、首相官邸や各省庁、国会議員、民間企業など、さまざまなアクターが協力して会議を開くようになり、時代の大きな変化を感じています。

アフリカでは、2000年代以降の経済成長に伴い、貧困人口（1日1・90ドル以下で暮らす人々）は減少に転じているものの、今なお3億人以上が貧困ライン以下にあると言われています。今起きている資源価格の下落などが長引けば、再び貧困層が増える可能性も否定できません。

今のアフリカに必要なのは、貧困層に焦点を当てた援助と、それと並行した社会全体のインクルーシブな開発を通じた根本的



アフリカ部企画役  
(TICAD・開発政策分析担当)  
**吉澤 啓**  
YOSHIZAWA Kei

1985年、旧JICA入団。93年、旧通産省出向中にTICAD IIに参加。モロッコ事務所の他、OECD/DAC事務局などの勤務を経験。2008年のJICA・JBIC統合以降、アフリカ部でTICADや開発政策分析を担当。



海上保安に関するプロジェクトでジブチを訪れ、ソマリア沖海賊対策の一環としてジブチ沿岸警備隊に供与された巡視艇を視察した

な貧困削減です。TICADを通してJICAがアフリカの援助方針や事業計画を鍛え上げ、それを発信・実行していくことが重要です。さらに、援助以外にも日本がアフリカにできることはたくさんあります。さまざまな立場の人にアフリカの重要性を知ってもらいたいと考えています。

先進国と途上国の間の格差は正、貧困削減、そして、アフリカの人々が将来に希望を見出せること——、それが私の「初心」です。自分の生活の基盤である家族や日本社会への貢献・恩返しを大切にしながら、これからも初志貫徹を心掛けたいと思います。



国連開発計画 (UNDP) のアフリカの構造改革に関するシンポジウムで発表する吉澤さん

「JICA地球ひろば」設立10周年を記念した感謝祭

01

市民による国際協力を推進するための拠点として2006年4月に設立された「JICA地球ひろば（東京都新宿区）」が、5月28日に10周年を迎え、記念感謝祭を開催しました。

感謝祭には、元サッカー日本代表の北澤豪さん、押切もえさん、さかなクンの3人のJICAオフィシャルサポーター／なんとかしなきゃ！プロジェクトメンバーがスペシャルゲストとして登場。それぞれの活動を報告しました。

会場には、JICAの事業だけでなく、国際協力や交流を行うNGOなどのブースが設置され、1200人近くの来場

者が、活動紹介やフェアトレード商品の販売など、幅広い企画を楽しみました。

JICA地球ひろばには、この5月までに延べ140万人が訪れています。訪問者が開発途上国の人々への共感や連帯感を育む場となる一方、NGOや市民団体にとっては、情報発信・交流・研修の拠点となっています。

感謝祭では、スペシャルゲストの活動報告の他、青年海外協力隊設立50周年を記念して制作された映画「クロスロード」の特別上映とすぎじゅんいち監督のスペシャルトークや、世界の伝統音楽の演奏などが行われました。



[左上] 仁田知樹元JICAブータン事務所長とブータン訪問時のエピソードを話す押切さん  
[右上] さかなクンのトークショーに、多くの子どもたちが耳を傾けた  
[下] 地球ひろばの体験ゾーン



来場者からは、「自分に何ができるかを考え、いつか協力隊に参加したい」「多くの人が海外でがんばっていることを知り、自分も協力したいと思った」などの感想が寄せられました。

地球ひろばには3つのゾーンがあり、さまざまな形で国際理解と開発協力を推進しています。

体験ゾーンでは、国やテーマ別の展示を企画・開催。途上国を中心とした世界の課題を、体験型展示を通じて学ぶことができます。学びをサポートするのは、青年海外協力隊員OBなど、国際協力の現場での経験を持つ「地球案内人」。展示について、実体験に根差した説明を行っています。

交流ゾーンでは、登録された国際協力・交流団体に有料・無料で会議室を貸し出ししており、報告会やセミナー、交流の場として活用されています。

また、飲食スペース「s Cafe」では、隔月で実施している国別展示に合わせた途上国の料理をランチタイムに提供しています。

この他、地球ひろばでは、社会科見学や修学旅行など、グループでの国際理解教育プログラムに対応した受け入れプログラムや、中学生・高校生のエッセイコンテスト、教員を対象とした海外研修なども開催。さらに、国際理解と開発教育のための教材貸し出しも行っており、市民参加による国際協力と国際交流を多角的に応援しています。

世界と日本のつながりを知り、世界のために私たちができることを市民のみならずと一緒に考え、実践するための場所「地球ひろば」。ぜひ地球ひろばを訪れ、あなたにもできる協力のヒントを見つけてみてください。

スリランカの豪雨被害に対する国際緊急援助

02

5月15日からスリランカ西部を中心とする地域で豪雨が続いており、各地で洪水や土砂崩れなどが発生しています。この被害に対する同国政府からの支援要請を受けて、JICAは緊急援助物資を供与しました。

現地当局の発表によれば、現地時間5月19日時点の被害状況は、死者58人、行方不明者144人、被災者約42万人、被災家屋3438戸に上っています。加えて、浸水による農作物の被害や土砂災害による道路の寸断といった二次的被害も発生しています。

JICAが供与した毛布や簡易水槽、浄水器などの緊急支援物資は、21日にコロンボに到着。物資の引き渡し式には、スリランカ災害管理省のアヌラ・プリヤダルシヤナ・ヤーパ災害管理大臣、菅沼健一在スリランカ日本国大使、天田聖JICAスリランカ事務所長らが出席しました。ヤーパ災害管理大臣は、日本が他国に先駆けて支援物資を届けたことに感謝の意を示しました。

今回供与した援助物資は、同国政府により被災者に届けられます。



引き渡し式の様子(左から菅沼大使、ヤーパ大臣、天田事務所長)

## 近代化する町が抱える問題

**日** 本を出発して約1日、夜と朝を越え、窓の外に見えてきたのはどこまでも広がるサハラ砂漠でした。砂埃舞う褐色の町、スーダンの首都ハルツームに降り立ち、空港のアラビア語の表記が目に入ると、ずいぶんと未知の国にきたなあと感じました。以前はサッカー選手として海外遠征に、現在は、スポーツキャスターとして海外へ取材に行くことを見る機会が、これが初めてです。

スーダンの大きさは日本の約5倍、アフリカでも3番目の大きさで、国土の大半を砂漠が占めています。ウガンダから流れる白ナイル川、エチオピアから流れる青ナイル川がぶつかる一帯に首都ハルツームが栄え、ナイル川はそこから一つに合流してエジプトへと流れていきます。

同国の北部には、かつてエジプト地域

をも支配した王国があり、世界遺産にな

っているピラミッド群があると聞き、驚きました。悠久の歴史を感じさせるスーダンですが、首都は近代的なビルも増え、中東をはじめとする多くの外国企業が進出し、急速に発展しています。

その反面、近代化が進み、首都の人口が増えたことで顕著になった社会問題があります。それは、ごみの増加です。町中の至るところにビニールや廃材、生ごみが散乱し、郊外では、ビニール袋やプラスチックが引っ掛かってクリスマスツリーのような低木がどこまでも広がっていて、あせんとしました。

## 問題解決に日本式の包括的な支援

日本は、2014年からスーダンのごみ問題の解決に向けて、「ハルツーム州廃棄物管理強化プロジェクト」と「ハルツーム州廃棄物管理能力向上計画」という2つのプロジェクトを実施しています。1日に5000トンものごみが発生

## 特別レポート

# スーダンに笑顔を運ぶごみ収集車

元サッカー日本代表でスポーツキャスターの永島昭浩さんが、今年2月、アフリカ大陸北東部のスーダンを訪れた。そこには、近代化に伴い悪化する都市のごみ問題が……。現地の様子をリポートする。



ごみ回収作業員には、モチベーション向上のためにユニホームが支給された。収集車で市内を回り、決まった時間に決まった場所でごみを回収する



スーダンでも大人気の「キャプテン翼」のステッカーが貼られたごみ収集車 ©Yoichi Takahashi / SHUEISHA

になりました。老若男女、知らない人はまずいません。住民にごみ収集について考えてもらうきっかけとして、著者・高橋陽一先生のご協力の下、今回このような試みがなされました。新しいごみ収集車を見つけた人は、大人も子どもも皆、笑みがこぼれます。元サッカー選手として、また、一人のファンとして、「キャプテン翼」がスーダンの廃棄物処理支援や、日本との良好な関係構築に一役買っている現場を見られたことをうれしく思いました。

新しいごみ収集車が導入されてまだ数カ月。将来、ごみのないハルツームに出会えることが、今から楽しみです。スーダン滞在の最終日、地元の少年たちにサッカーを指導する永島さん。基本練習から始まり、最後はゲームで盛り上がった



プロジェクトの石井明男専門家から説明を受ける永島さん

するハルツームでは、ごみ収集車の数が足りず、地域によっては2カ月もの間、収集車が来ないこともあります。そこで、日本はごみ収集車80台を供与し、車両の整備工場も建設したのです。

ハード面の支援だけではありません。現地の車両整備士を育成し、決まった時間に決まった場所でごみを収集する、「定時定点回収」という日本のごみ収集システムをスーダンに導入したのです。日本では当たり前のごみ収集システムですが、スーダンでは新たな試みです。

## 人気漫画がごみ問題解決を後押し

スーダンでは、「参加型廃棄物管理」という廃棄物処理の実践を目指していま

す。これは、日本のように、住民自らが決められた時間にごみをごみ置き場まで運ぶ方法です。「このような行動を通して、住民にごみ処理は住民の責任である」という自覚を徐々に持つてもらおうとを目指しています」と、プロジェクト専門家の石井明男さんが話してくださいました。難しい問題だからこそ、やりがいがあるとおっしゃるその姿が頼もしく映りました。

さらに、ここで心強い助っ人の登場です。2月に引き渡された80台のごみ収集車には、日本の漫画「キャプテン翼」のステッカーが貼られているのです。世界中で多くのファンを持ち、アニメにもなった「キャプテン翼」は、スーダンでも90年代にテレビ放映され、瞬く間に人気



少年たちにサッカーの指導をする永島さん。基本練習から始まり、最後はゲームで盛り上がった

ちにサッカーを指導する機会に恵まれました。彼らは、日本のNPO法人「ロシナンテス」が長年にわたって支援してきたサッカー少年たちです。プレーは荒削りではあるものの、一人一人から「うまくなりたい!」という強い気持ちやピシビシと伝わってきます。私もその思いに応えるべく、真剣に向き合ったつもりです。たくさんの方の可能性を秘めた彼らの将来が明るいものであることを祈らずにはいられません。

永島 昭浩 (ながしま あきひろ)

1983年、松下電器産業(現パナソニック)に入社。Jリーグ開幕した93年に、日本人初のハットトリックを達成。その後、清水エスパルスやヴィッセル神戸で活躍。2000年の現役引退後は、JFAアンバサダーとしてサッカーの普及活動に尽力。現在は、スポーツキャスターとしてテレビトークショー、講演会などで活躍する傍ら、サッカースクールなどで後進の指導に携わる。



### Q3. TICAD を通して日本はどう貢献しているの?

A3.

日本政府は、アフリカの発展のために日本が果たす役割を、TICADの場で具体的に提示しています。前回のTICAD Vでは、安倍晋三内閣総理大臣が「5年間で約1.4兆円の政府開発援助（ODA）、官民合わせて最大で約3.2兆円の支援を通じてアフリカの成長を後押しする」と明言しました。

その内容は、(1)経済成長の促進、(2)インフラ整備・人材育成の強化、(3)農業従事者のエンパワーメント、(4)環境や防災分野での持続可能かつ強靱な成長の促進、(5)万人の教育や保健サービスの充実を通じた社会開発、(6)平和と安定の定着—、の6分野となっており、日本を含む各国が「横

浜宣言」に沿った支援を約束しています。

アフリカ諸国は、地域統合による貿易や投資の促進を目指していますが、横浜宣言の各分野の支援は、そうした動きを加速させるものとなるでしょう。

また、日本企業が現地の人材育成に果たす役割も重要です。これまでも、日本の製造現場における業務の効率化や安全性の向上に対する意識が、「KAIZEN」としてアフリカ諸国に浸透。エチオピアでは、工業省にカイゼン機構が設立されたほどです。

アフリカは今後さらなる発展を遂げる“可能性の大陸”であり、重要なパートナーです。日本の皆さん、そして、アフリカの方々にも、この夏のTICAD VIにぜひ注目してもらいたいと思います。

### Q1. アフリカってどんなところ?

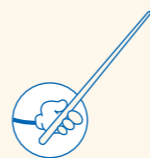
A1.

私たちは普段、何気なく“アフリカ”と一まとめに言ってしまうすよね。でも、アフリカ大陸は政治体制や経済規模、言葉、文化などの異なる54の多様な国々から構成されているのです。人口の面でも、例えばボツワナはわずか200万人程度の小さな国ですが、ナイジェリアは2億人を抱えています。

アフリカ大陸の一般的な地域区分は、東部、西部、南部、北部に中部を加えた5地域です。このうち、特に、東部と南部では経済発展が進んでいると

言えるでしょう。中でも、大陸最南端に位置する南アフリカ共和国には、アフリカの国々の中で最も多くの日本企業が進出しています。

アフリカはこれまで、政治や経済、社会的な統合を推進し、協力関係を強化してきました。その中心的な役割を担っているのが、全アフリカを束ねる機関であるアフリカ連合(AU)です。国や地域ごとに事情は異なりますが、多様な国々が結束して、アフリカの発展を目指しています。



南アフリカ共和国のHIVホスピスに、殺菌・ウイルス不活性化効果のある塗料を日本企業が提供した(写真提供:関西ペイント株式会社)



セネガルの職業訓練センターでの指導の様子(写真提供:今村健志朗/JICA)



TICAD Vで共同記者会見を行う安倍総理(写真提供:内閣広報室)

### Q2. TICAD って何?

A2.

日本は1993年以降、5年おきにアフリカの開発をテーマとする国際会議を主催してきました。アフリカ開発会議(TICAD)と呼ばれるこの会議には、アフリカ諸国の首脳が一堂に会します。国連や世界銀行、国連開発計画(UNDP)、アフリカ連合委員会(AUC)を共催機関とし、欧米やアジアのドナー国なども参加して、アフリカの開発政策を議論するのです。

TICADが立ち上がった90年代初頭、世界は冷戦終結を迎え、国際社会のアフリカへの関心は薄れていきました。そんな中、アフリカを重要視し、発展に向けて開発協力をリードしたのが日本だったのです。

2008年に横浜で開催されたTICAD IV以降は、議論

の焦点がよりビジネスに置かれるようになってきました。会議には、民間企業や市民団体からの参加者が増え、13年のTICAD Vには、4,500もの人々が参加しました。

これまで5年ごとに日本で開催してきたTICADですが、アフリカ諸国からの提案で、今後は3年ごとに日本とアフリカで開催地を交替しながら実施することになりました。次のTICAD VIは、今年の8月27~28日にケニアの首都ナイロビで開催されます。

国際資源価格の低下やエボラ出血熱をはじめとする感染症の流行、暴力的過激主義の拡大といったアフリカ地域の新たな課題に対して、日本としてどう貢献していくかが議論の焦点になるでしょう。

## Message from Ethiopia

### エチオピアで進む「カイゼン」の普及

「カイゼン」は、戦後日本の高度経済成長期に主に製造業で導入が始まった、5S(①整理、②整頓、③清掃、④清潔、⑤しつけ)をはじめとする、生産性や品質の向上を目指す考え方や行動様式を指します。



日本人の専門家の指導の下、カイゼンを学ぶ工場の労働者たち(写真提供:菊池剛)

エチオピアでは、この「カイゼン」が「KAIZEN」として、広く浸透しています。故メレス首相によるカイゼンの導入以降、「エチオピア・カイゼン機構」が設立され、同機構を通じて、JICAの技術協力による「品質・生産性向上(カイゼン)普及能力開発プロジェクト」が実施されています。

また、「カイゼン月間」に指定された9月には、毎年さまざまな行事が開催されるなど、カイゼンはエチオピアの国民運動となっています。

今年3月、エチオピア政府はJICAと共催で「カイゼン知見共有セミナー」を開催しました。アフリカ連合委員会の他、カイゼンを実践しているケニアやガーナなど、10カ国以上から約100人が参加し、各国での取り組みや成功例を紹介し合い、大盛況に終わりました。

日本政府は、1993年からTICADを開催し、アフリカの持続的な経済成長を後押しすべく、産業人材の育成を支援しています。エチオピアに広がるカイゼンは、人々が目の前の課題を主体的に考え、より良い方向へ導くために努力し続けるモチベーションとなっており、日本が目指す産業人材の素地が形成されつつあります。

(在エチオピア日本国大使館)

## POINT

1 アフリカは54の国々で構成され、経済規模や文化は多様

2 TICADは、日本が立ち上げたアフリカの開発に関する国際会議

3 日本は、各分野の具体的な戦略を通じて、アフリカの発展を後押し

## テーマ アフリカと日本の関係

外務省 中東アフリカ局  
アフリカ部 アフリカ第二課長

中川 周

NAKAGAWA Shu

1992年、外務省入省。在ジュネーブ国際機関日本政府代表部や経済局経済連携課、内閣官房TPP政府対策本部などを経て、2013年9月より現職。今年8月のTICAD VIに向け、アフリカ第二課長としてアフリカとの関係強化に取り組む。



「ここが知りたい」。国際協力に関する政策を外務省の担当者が分かりやすく解説します!

# 無の大地に生きる

## Niger

[ニジェール]

写真・文＝大塚雅貴(写真家)



井戸での水くみを終えて集落に帰ってきた子どもたち。はじめて見るカメラの前で少し照れながらも集落のみんなが撮影を楽しんだ



a

- a. トゥブ族の女性は赤や黄色などの鮮やかな衣装に身を包み、鼻や耳、手首などにアクセサリーを付け、おしゃれを楽しむ
- b. 井戸にはラクダ、ヤギ、ロバなどの家畜が集まる。ヤギは彼らにとって大切な現金収入となる
- c. 体高2メートルほどの大ラクダを引っ張り、井戸での水くみを手伝う男の子



b



c



夕暮れの砂漠の中をゆっくりと進むラクダキャラバン

が難しいため、ガソリン250リットル、ミネラルウォーター60本、ガス、米やパスタ、缶詰などを四輪駆動車に詰め込み、地元出身のガイドと共に出発した。途中、憲兵隊のオフィスを立ち寄り、砂漠への立ち入り許可を申請。一日半かけてたどり着いた先には、わずかに草の生えた砂漠の大地が広がり、彼らの家が数軒並んでいた。辺境で暮らす彼らは用心深い。常にナイフを携帯し、撮影を嫌うトゥブ族だが、訪れたのがガイドが暮らす集落だったため、到着と同時にみんなが歓迎してくれた。

ニジェール第二の町、ザンデルから北東へおよそ400キロのテルミットという地域に、彼らは暮らしている。ザンデルから北は砂漠地帯。給油所や食料の確保

が難しいため、ガソリン250リットル、ミネラルウォーター60本、ガス、米やパスタ、缶詰などを四輪駆動車に詰め込み、地元出身のガイドと共に出発した。途中、憲兵隊のオフィスを立ち寄り、砂漠への立ち入り許可を申請。一日半かけてたどり着いた先には、わずかに草の生えた砂漠の大地が広がり、彼らの家が数軒並んでいた。辺境で暮らす彼らは用心深い。常にナイフを携帯し、撮影を嫌うトゥブ族だが、訪れたのがガイドが暮らす集落だったため、到着と同時にみんなが歓迎してくれた。

国土の3分の2がサハラ砂漠に覆われているアフリカ中部のニジェール共和国。その北東部には、現地の言葉で「何も大地」を意味する「テネレ」という地域が広がり、高さ200メートルを超す砂丘や往復約1600キロを行くラクダキャラバンを見ることができる。日中の気温は、暑い時期で40度を超え、3月を過ぎると熱風が吹き砂塵が舞う。



夜になると風は止み、満月の輝きが大地を照らし出す。1月には気温10度以下になることも



お気に入りの衣装をプレゼントされた女性は、それを大きく広げて喜んだ



多くの女性が自宅で出産するため、時に母子に危険が伴う。皆、生まれてくることへの感謝を忘れない

翌年も、その翌年も、彼らに会うためにテルミットを訪れた。最初の年は緊張していた彼らの表情も、再会するたびにほころんだ。一方で、砂漠の環境は年々悪化している。地球温暖化の影響だろうか、「昔よりも暑くなった」と、初老の男は話す。数年前にあった井戸が枯れ、無人となった場所も少なくない。そんな中で地道にラクダを飼い続けるその男は「ここで暮らすことが何より幸せだ」と、続けた。家族や親戚同士で集落を形成し、この砂漠で団結して生き抜くことが彼らの生き方であり、誇りでもある。そしてその思いが、この小さな世界を育んでいるのだと感じた。

家は、アカシアの木を骨組みに使い、ナツメヤシの葉を乾燥させたものを編んで屋根としてかぶせたもので、季節によって位置を変える。中は日差しが遮られ、風通しも良く、居心地は悪くない。聞こえるのは耳元を流れる風とロバの鳴き声だけ。電気やガスはなく、水は大きな容器を深さ50メートル以上の井戸に落とし、ラクダやヤギの力で引き揚げる。食事はというと、南の市場で購入した雑穀をペースト状にしてラクダのミルクとともに食べることがほとんどで、野菜などはない。

最初目に引いたのは、女性の衣装だった。赤や黄の派手な色を好み、遠くからでもその姿は際立っていた。鼻にはピアス、耳や腕には銀のアクセサリ。ガイドがザンデルで買った衣装をプレゼントすると、それを広げ、目を見開いて喜んだ。早速、衣装を身に付けてた女性たちは「どう、似合ってる？」と、モニターに映る自分の姿を見てうれしそうに飛び上がった。



南部の市場で購入した雑穀をきねでついて粉末にし、それを調理してラクダのミルクとともに食べる

最初に目を引いたのは、女性の衣装だった。赤や黄の派手な色を好み、遠くからでもその姿は際立っていた。鼻にはピアス、耳や腕には銀のアクセサリ。ガイドがザンデルで買った衣装をプレゼントすると、それを広げ、目を見開いて喜んだ。早速、衣装を身に付けてた女性たちは「どう、似合ってる？」と、モニターに映る自分の姿を見てうれしそうに飛び上がった。

### 大塚 雅貴 (おおつか まさたか)

1968年、千葉県生まれ。93年、写真家・野町和嘉氏の助手としてサハラ取材に同行。97年からカイロに1年半在住。リビア、ニジェール、チャドなどのサハラ砂漠や、中国・雲南省の棚田を取材。著書に『SAHARA 砂と風の大地』(山と溪谷社)がある。

ロバの力を使って深さ50メートル以上の井戸から水をくむ少年は、何度もラクダのために水を与え続けた



不要となったタイヤのチューブは、水を入れる容器として使う



## 北部の名物といえば

### 銀細工



工房の店頭に並ぶさまざまな銀細工

サハラ砂漠の入り口となるニジェル第二の都市ザンデルや、砂漠の中にある交易の中心地アガデスは、銀細工で有名だ。「ニジェルの銀細工はデザインが優れていて、パリコレに出展するような世界の一流デザイナーが取り入れることもあるんです」と、浦安市国際センターのセンター長を務める藤松理子さんは、自身のニジェルでの滞在経験を基にそう話す。銀細工の多くは、トゥブ族と同様にサハラ砂漠で遊牧生活を送るトゥアレグ族の鍛冶屋が作っている。

トゥアレグ族の住む地域にはそれぞれシンボルがあり、それらを模した21種類の銀細工が町の工房で売られている。キリスト教とは無関係だが、形が十字架に似ているため、フランス語で十字架を表すクロワと呼ばれることが多いこれらのシンボル。アガデス十字(クロワ・ダガデス)は、意中の女性に愛を伝えたいと思ったトゥアレグ族の若者が、鍛冶屋に頼んで「愛しています」という言葉の頭文字をアクセサリーのデザインに忍ばせて贈ったことから生まれたという言い伝えがあるという。

欧米や日本でも、アフリカの工芸品として売られていることがあるニジェルの銀細工。見掛けることがあったら、ぜひその裏に隠されたメッセージに思いをはせてほしい。



21種類のクロワの形と、その名前が描かれた布。現地の人たちにはよく知られるシンボルド

## 地球ギャラリー

### ニジェルの文化を知ろう!

ニジェルの言い伝えでは、ムギとヒエは神様の祝福を受けているので、水を入れて炊くと膨らみ、ほんの少しの量でも腹が満たせるのだとされている。ヒエなどの雑穀をよく食べるトゥブ族の間では、「キラエスク」と呼ばれる成人式の中で、少女たちがブラビスコの作り方を習い、皆で食べるという。

ニジェル出身のラミン・アルカスムさんは、「ブラビスコの作り方が

上手い女性は、男性と添い遂げられるといわれているのです。少量のヒエでお腹を満たせるブラビスコは、家計にやさしい料理だからかもしれない」と笑った。

日本人女性と結婚して長年、日本に住んでいるラミンさんは、現在、茨城県つくば市でカフェを開く準備をしている。ニジェルの文化を知り、食事を楽しみながら交流する場を目指している。

## トゥブ族の料理といえば、ヒエと肉を煮込んだ

### ブラビスコ



ラミンさんのカフェ「Café d'Agadez」の情報は、Facebookページでもご覧いただけます  
<https://www.facebook.com/カフェアガデス-Cafe-dAgadez-299645633495515/>

## 【RECIPE】

### ●材料(4人前)

ヒエ300g/タマネギ中1個/ニンニク1かけ/トマト200g/鶏モモ肉500g/塩・コショウ/サラダオイル/ハイビスカスの花(ハーブティー用)

- 1 鶏肉は一口大に切って、塩コショウを振っておく。ニンニクとタマネギはみじん切りにする。トマトは角切りにする。
- 2 ヒエは2~3回水を替えながら洗い、水を切る。鍋に入れ、水3カップと塩ひとつまみ、サラダオイル大さじ1を入れてかき混ぜながら煮る。水分がなくなってきたらごく弱火で15分炊き、10分蒸らしておく。
- 3 熱した鍋にサラダオイル大さじ2を熱してニンニクの香りが出るまで炒める。タマネギを加えて炒め、タマネギが透き通ってきたら鶏肉とトマト、ハイビスカスを加えて煮込む。塩で味を調べて、ヒエと共に皿に盛りばれ出上がり。

# イチオシ!

## M OVIE

### 『ラサへの歩き方～祈りの2400km』

チベット東端の小さな村。生涯一度は巡礼したいという老人の願いに応えようと、妊婦、家の建設中に事故に遭った夫婦と末娘、家畜解体を生業にする男など、老若男女11人が集まった。両手・両膝・額(五体)を地面に投げ伏して祈る「五体投地」で、村から1,200km離れた聖地ラサに参詣し、さらに1,200km西のカイラス山に向かう。時間にしてほぼ1年。巡礼の準備から始まり、道中では、出会いや新しい命の誕生、事故や死にも直面する。人に助けられながら、壮大な風景や雪山に沿ってひたすら祈りながら進む、心洗われるチベット巡礼物語だ。(文=高倍宣義)



2015年/中国/1時間58分  
監督・脚本：チャン・ヤン  
出演：チベット巡礼の旅をする11人の村人たち  
公開：7月23日よりシアター・イメージフォーラム(渋谷区)ほか全国順次公開  
URL：[www.moviola.jp/lhasa](http://www.moviola.jp/lhasa)  
配給：ムヴィオラ

## B OOK

### 『医者のおたまご、世界を転がる。』

東京都内で研修医として修行を積んでいた著者は、「自分の知らない世界をたくさん残したまま、医者になってもいいのか」という疑問から、研修医修了と同時に世界へと飛び出した。医師がないネパールの村、西洋医学を超越した「シャーマン」による診療が行われているインドの奥地、日本人が医療巡回をするケニアのスラムなど、約3年間で訪れた国は52カ国。旅先で何を感じ、そして、なぜ帰国後は救急救命医になる道を選んだのか。本書は、駆け出しドクターが成長する姿を描いた、等身大のエッセイだ。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

中島侑子 著  
ポプラ社  
1,404円(税込)

## E VENT

### 『アフリカ日比谷フェスティバル2016』

54カ国が多種多様な顔を持つアフリカ。このイベントでは、そんな個性溢れるアフリカの文化や食、音楽にどっぷりつかることができる。毎年人気なのが、各国本場の料理が勢ぞろいのフードコート。世界最小の Pasta と言われる「クスクス」や、30種類以上のハーブやスパイスを使った「ヤサ・チキン」などの伝統料理を味わうことができる。また、料理教室や手作りビーズ体験など、体験型のワークショップも盛りだくさん。迫力ある生演奏やダンスといったライブステージにも注目だ。



会期：7月9日(土)・10日(日) 10:00~21:00 (最終日は17:30)  
場所：日比谷公園  
問：アフリカヘリテイジコミュニティ  
TEL：045-479-2275、042-707-1900  
URL：[www.africah.web.fc2.com/event/j-hibiya2016.html](http://www.africah.web.fc2.com/event/j-hibiya2016.html)

## B OOK

### 『翻訳できない世界のことば』

外国語の中には、他の国の言語ではそのニュアンスをうまく表現できない「翻訳できない言葉」がある。例えば、イタリア語の commuovere(コムオーベレ)は、「涙ぐむような物語に触れたときに、感動して胸が熱くなる」という意味。インドネシア語の jayus(ジャユス)は、「逆に笑うしかないくらい、実は笑えないひどいジョーク」という、複雑で繊細な意味を持つ。本書はそんな言葉の数々を、著者の感性豊かな解説とユニークなイラストで紹介している。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

エラ・フランシス・サンダース 著  
前田まゆみ 訳  
創元社  
1,728円(税込)

いよいよ来月から、ブラジルのリオデジャネイロで、オリンピック・パラリンピックが始まります。日本選手の活躍に期待が高まりますが、外国選手に目を向けると、普段私たちにはなじみが薄い小国の選手が、思わぬ活躍をして大国の選手を負かす、などというドラマに感動するのも、スポーツの祭典ならではの醍醐味ですね。

今回のオリンピックには、東アフリカに位置する南スーダンが、国として初めて公式参加します。長年にわたる紛争を経て2011年に独立した後も、国際社会の協力を得ながら国の安定化のために努力を続ける南スーダン。経済的にも、また施設の面でも、人々がスポーツを楽しむ環境がまだ乏しいこの国に対し、日本は独立後初となる国民体育大会の開催を支援するなど、平和な社会づくりに向けた協力を行っています。大きな希望を背負うオリンピック代表選手を、私たちも心から応援したいと思えます。

54カ国からなるアフリカの姿は、国によってさまざまです。本誌で紹介したように、豊富な天然資源と若年人口の多さに根差した経済成長や、高まる投資といった明るい話題にあふれる国々が増える一方で、感染症や紛争、テロなどのリスクと闘い、困難に直面する国や地域も依然として存在します。アフリカの光と影、それぞれの国が抱える課題にきめ細かく、かつ柔軟に取り組むことが、日本には期待されています。

来たるオリンピック・パラリンピックでは、アフリカからの代表選手も数多く活躍することでしょう。その興奮も覚めやらぬ8月末には、ケニアで第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）が開催されます。一連のイベントをきっかけに、日本にとってますます「近づくアフリカ！」を実感できる夏となりそうです。

JICA広報室広報課 原三佳

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。



添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2016年8月15日

Eメール：jica@idj.co.jp  
FAX：03-3221-5584（『mundi』編集部宛）

- ① ミャンマー産レースのピアス
- ② 書籍『医者のためご、世界を転がる。』（p37参照）
- ③ 書籍『翻訳できない世界のことは』（p37参照）



本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形で送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金の確認後、発送を手配いたします（入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください）。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)  
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F  
TEL 03-3221-5583  
FAX 03-3221-5584  
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2016年8月1日発行予定)

生物多様性

待ちに待った夏休み。家族で動物園や水族館に出掛けるという人も多いのでは。実は、地球上に存在する数多くの生き物を守るために、日本はさまざまな国際協力を行っています。「自然と共生する世界」の実現を目指す、日本の取り組みを紹介します。



©Yuki Asada

## 母の手が編む誇り

シャトルと呼ばれる糸巻きを使って糸を組み、繊細な模様を織り上げるタッティング・レースの文化は、植民地時代に英国からミャンマーに持ち込まれた。今でも北部の一部地域では、女性たちが参拝用のショールなどを何カ月もかけて編み上げる。

山本久美子さんは女性たちの高い技術と造形の美しさにほれ込み、ミャンマー雑貨店のdacco.と共同で販売を開始。「伝統的な手仕事で作られた民芸品や織物は質が良いのですが、職人の地位や所得が高い技術に釣り合うものになっていないのです」と話すのは和田直子さん。ミャンマー各地の民芸品を流通させたいという思いから、2010年にdacco.を立ち上げた。

レースのアクセサリーを作っているのは、ミャンマー北部シャン州のモゴックとい

う町からヤンゴンに出てきた女性。レース編みは母から習ったという。彼女自身も娘に編み方を教え、今は親子3代でアクセサリー作りを手掛けている。

「商品の作り手が、職人として自信と誇りを持って仕事に取り組み、高い技術にふさわしい収入を得られる環境づくりを目指しています。職人たちが適切な報酬を得ることで、作品が市場に流通し、技術が受け継がれていくようにしたいのです」と語る和田さん。dacco.では、タッティング・レースの他にも、少数民族の織物で作ったポーチやクッションカバーなどの日用品、さまざまな素材の編み籠、南洋真珠や白蝶貝でできたアクセサリーなど、ミャンマーの文化を大切にしたいオリジナル商品を展開し、伝統技術の継承を支えている。



一つ一つ手作業で作られるアクセサリー。この技術が受け継がれていくために、職人の収入向上は不可欠だ

★ミャンマー産レースのピアスを5人にプレゼント!  
→詳細は38ページへ

★dacco.で扱うタッティング・レースアクセサリーはHladee(ラーデー)のウェブサイトからも購入できます。<http://hladee.ocnk.net/>







私の  
**なんとか  
しなきゃ!**

Vol. 69

## PROFILE

東京都出身。桐朋学園大学音楽学部声楽科卒業、同研究科修了。1988年モーツァルト作曲歌劇「魔笛」童子Iでオペラデビュー。二期会オペラ講座「ルル」をはじめ、古典から現代までオペラ作品のみならず、コンサートに多数出演。2008年より世界各国の国歌を通じた国際友好親善活動を始め、12年にはパレスチナとイスラエルを訪問した。二期会・東京室内歌劇場会員。

全国各地で公演活動を行う中で、これまで印象に残る出会いがたくさんありました。最近では、世界各国の国歌を通じて、国境を超えたつながりも生まれています。

きっかけは、私の恩師が企画していたインターネットテレビの番組です。内容は、さまざまな国の駐日大使をゲストとして招き、各国の生の情報を語ってもらうというもの。その番組の冒頭で、相手国の国歌と、日本の君が代を歌ってほしいと頼まれたのです。こうして「国歌外交官」と名付けられた私は、2008年にこの活動を始めましたが、最初は苦勞の連続でした。

驚いたのが、これまで学んできた五線紙の楽譜が存在するのは、西洋音楽の世界だけだと知ったこと。アフリカや中東の国歌の多くは楽譜の存在が定かではなく、恐らく口伝などで歌い継がれてきたのでしょう。テープを聞きながら練習したり、大使館の職員に確認してもらったりすることもあり。苦戦しましたが、完璧に仕上げた歌ったと

きには、本当に喜んでもらえます。番組をきっかけに、海外の政府関係者の来日レセプションや、大使館主催のイベントに呼んでもらう機会も増えました。イスラエルの方々を前に国歌を歌った際、全員が涙を流して「こんなに美しく歌ってくれてありがとう」と感謝されたことは、今でも忘れられません。

君が代は穏やかで平和な歌ですが、世界には激しい国歌も存在します。領土争いを背景に持つ歌や、血を意味する「赤」という言葉が歌詞に出てくる歌など、国歌を通してその国の歴史が見てきます。また、スリランカの新年祭に出席した際には、牛乳を沸騰させて一年の幸せを願うという正月の慣習を知りました。この活動をしていなければ、こうした各国の伝統や文化に触れる機会もなかったと思います。

私が出演するコンサートで、世界の民謡を紹介することもあります。おとし、親しくしているアルバニアの大使夫妻から教わった民謡を歌ったのですが、会場に来ていたシリアの大使が、

## 国歌が紡ぐ世界との絆

ソプラノ歌手 **新藤昌子**  
SHINDO Masako

「次はシリアの曲を歌ってほしいな」とうらやましそうな顔をしていました。皆さん温かくて気さくな方ばかりなんです。外国の歌を披露する一方、日本の素晴らしい唱歌を海外に紹介できる若者を増やしたいと思い、地元の学校で開かれる出前講座の講師も務め、子どもたちと一緒に日本の歌を歌っています。

国を象徴する国歌を歌うことには、並大抵ではないプレッシャーが伴いますが、私は、国対国という大きな関係で捉えるのではなく、人対人の小さな積み重ねを大切にしたいと思っています。その一曲に歓喜すること、涙すること、心癒されること——。音楽が持つ世界共通の力を、多くの人に感じてもらうことが私の願いです。

「なんとかしなきゃ! プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

「なんとかしなきゃ」で  検索